

平成二十三年厚生労働省令第九十三号

職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則

職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律（平成二十三年法律第四十七号）の施行に伴い、並びに同法第四条第一項第三号、第七号、第十一条第三号、第十六条第四項、第十八条第一項及び第二項、第十九条並びに附則第三条第二項の規定に基づき、職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則を次のように定める。

目次

第一章 認定職業訓練（第一条―第九条）

第二章 職業訓練受講給付金（第十条―第二十条）

第三章 就職支援計画書の作成等（第二十一条―第二十四条）

第四章 雑則（第二十五条―第二十九条）

附則

第一章 認定職業訓練

（認定の申請）

第一条 職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律（平成二十三年法律第四十七号。以下「法」という。）第四条第一項の規定による職業訓練の認定（以下この章において「職業訓練の認定」という。）を受けようとする者は、当該職業訓練の開始時期に応じ、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構（以下「機構」という。）の定める期間内に、職業訓練認定申請書（様式第一号）に厚生労働省人材開発統括官が定める書類を添えて機構に提出しなければならない。

（法第四条第一項第三号の厚生労働省令で定める基準）

第二条 法第四条第一項第三号の厚生労働省令で定める基準は、次の各号に掲げる事項について、当該各号に定めるとおりとする。

一 訓練を行う者 次のいずれにも該当する者であること。

イ 職業訓練の認定を受けようとする職業訓練（以下「申請職業訓練」という。）について、当該申請職業訓練を開始しようとする日から遡って三年間において、当該申請職業訓練と同程度の訓練期間及び訓練時間の職業訓練を適切に行ったことがあること。

ロ 申請職業訓練を行うおとする者が過去に申請職業訓練と同一の分野に係る認定職業訓練（法第四条第二項に規定する認定職業訓練をいう。以下同じ。）を行った場合にあつては、その実績が次のいずれにも該当すること。

(1) 申請職業訓練を行うおとする都道府県と同一の都道府県（実施日が特定されていない科目を含む申請職業訓練を行うおとする場合にあつては、全国）の区域内において、連続する三年の間に二以上の単位（職業訓練を行う一単位をいう。以下同じ。）の当該認定職業訓練を行った場合（当該二以上の単位の認定職業訓練が終了した日が連続する三年の間にある場合に限る。）に、当該認定職業訓練の受講を修了した第二号に規定する特定求職者等（以下「修了者」という。）及び当該認定職業訓練が終了した日前に就職した又は自営業者となったことを理由として当該認定職業訓練を受講することを取りやめた者（以下「就職理由退校者」という。）（以下「修了者等」という。）の就職率（修了者等のうち当該認定職業訓練が終了した日の翌日から起算して三月を経過する日までの間に雇用保険法（昭和四十九年法律第十六号）第四条第一項に規定する被保険者（以下この条において「被保険者」という。）となった者及び同法第五条第一項の適用事業の事業主となった者（当該認定職業訓練が終了した日において六十五歳以上の者を除く。）の数の合計数が、修了者（当該認定職業訓練が終了した日において六十五歳以上の者及び専ら就職に必要な基礎的な技能及びこれに関する知識（以下「基礎的な技能等」という。）を付与するための認定職業訓練（以下「基礎訓練」という。）の修了者のうち連続受講（基礎訓練から基礎的な技能等並びに実践的な技能及びこれに関する知識を付与するための認定職業訓練（以下

「実践訓練」という。）まで又は公共職業能力開発施設を行う職業訓練（以下「公共職業訓練」という。）までの連続した受講（これらの連続した受講について公共職業安定所長が指示したものに限る。）をいう。以下同じ。）をする者を除く。）の数及び就職理由退校者の数の合計数に占める割合（当該認定職業訓練が終了した日から起算して四月を経過する日までの間に当該認定職業訓練を行った者が機構に届け出たものに限る。）をいう。以下同じ。）が、次に掲げる認定職業訓練の区分に応じ、二以上の単位の当該認定職業訓練について、それぞれ次に定める割合を下回るものでないこと。ただし、当該認定職業訓練の修了者等の就職率がそれぞれ次に定める割合を下回ることが明らかになった日から起算して一年を経過する場合は、この限りでない。

(i) 基礎訓練 百分の三十

(ii) 実践訓練 百分の三十五

(2) 申請職業訓練を行うおとする都道府県と同一の都道府県（実施日が特定されていない科目を含む申請職業訓練を行うおとする場合にあつては、全国）の区域内において、連続する三年の間に二以上の単位の当該認定職業訓練については、当該認定職業訓練の修了者等の就職率が、(1)の(i)及び(iii)に掲げる認定職業訓練の区分に応じ、それぞれ(1)の(i)及び(ii)に定める割合を下回ることが明らかになった日から起算して一年を経過した日以後に、再び(1)の(i)及び(ii)に掲げる認定職業訓練の区分に応じ、連続する三年の間に二以上の単位の当該認定職業訓練について、(1)の(i)及び(ii)に掲げる認定職業訓練の区分に応じ、それぞれ(1)の(i)及び(ii)に定める割合を下回ることが明らかになった日から起算して五年を経過する場合は、この限りでない。

(3) 申請職業訓練を行うおとする都道府県と同一の都道府県（実施日が特定されていない科目を含む申請職業訓練を行うおとする場合にあつては、全国）の区域内において、第五条の規定により機構に提出する当該認定職業訓練に係る就職状況報告書における当該認定職業訓練の修了者等の就職率が、(1)の(i)及び(ii)に掲げる認定職業訓練の区分に応じ、それぞれ(1)の(i)及び(ii)に定める割合を下回ることが明らかになった場合に、当該就職状況報告書を機構に提出した後に当該認定職業訓練を行った同一の都道府県（実施日が特定されていない科目を含む認定職業訓練を行った場合にあつては、全国）の区域内において機構に対し当該認定職業訓練と同一の分野に係る職業訓練の認定の申請をする際、就職率の改善に関する計画を提出したこと。

(4) 連続する三年の間に二以上の単位の当該認定職業訓練を行った場合（当該二以上の単位の認定職業訓練が終了した日が連続する三年の間にある場合に限る。）に、第五条の規定により機構に提出する当該認定職業訓練に係る就職状況報告書において、当該認定職業訓練が終了した日の翌日から起算して三月を経過する日までの間の就職に関する状況が確認された修了者の数及び就職理由退校者の数の合計数の当該認定職業訓練の修了者等の数に占める割合（以下この(4)において「回収率」という。）が、二以上の単位の当該認定職業訓練について百分の八十を下回るものでないこと。ただし、連続する三年の間において二回目に回収率が当該割合を下回った認定職業訓練に係る就職状況報告書の提出期限の翌日から起算して五年を経過する場合は、この限りでない。

ハ 国、地方公共団体、特別の法律により特別の設立行為をもって設立された法人（その資金の全部若しくは大部分が国からの出資による法人又はその事業の運営のために必要な経費の主たる財源を国からの交付金若しくは補助金によって得ている法人に限る。）、独立行政法人及び地方独立行政法人でないこと。

ニ 申請職業訓練の実施日、受講者その他の申請職業訓練に関する事項を記載した帳簿を適切に保管すること。

ホ 申請職業訓練に係る苦情の処理に関する業務を公正かつ的確に遂行するに足りる業務運営体制を整備すること。

ヘ 申請職業訓練の受講者の個人情報を取り扱うに当たって、当該者の権利及び利益を侵害することのないような管理及び運営を行うこと。

ト 申請職業訓練が行われる施設ごとに、当該施設において行われる職業訓練の適正な実施の管理に係る責任者を配置すること。

チ ニからトまでに掲げるもののほか、申請職業訓練の適正な実施を確保するための措置を講ずること。

リ 次のいずれにも該当しない者であること。

(1) 法、職業能力開発促進法（昭和四十四年法律第六十四号）その他職業能力開発に係る事業に関する法律又は労働基準に関する法律の規定により、罰金以上の刑に処せられ、その執行を終わり、又は執行を受けることがなくなった日から起算して五年を経過しない者

(2) その納付すべき所得税、法人税、消費税、道府県民税、市町村民税、都民税、特別区民税、事業税、地方消費税、不動産取得税、固定資産税、事業所税及び都市計画税、社会保険料（所得税法（昭和四十年法律第三十三号）第七十四条第二項に規定する社会保険料をいう。）並びに労働保険料（労働保険の保険料の徴収等に関する法律（昭和四十四年法律第八十四号）以下「徴収法」という。）第十条第二項に規定する労働保険料をいう。第九条において同じ。）の納付が適正に行われていない者

(3) 過去に認定職業訓練に係る職務の遂行に関し重大な不正の行為をしたことを理由として、法第四条第二項の規定により同条第一項の認定の取消しを受けた者又は過去に認定職業訓練に係る職務の遂行に関し重大な不正の行為をしたことにより、当該認定職業訓練が同条第一項各号のいずれかに適合しないものと厚生労働大臣が認めた者（当該認定の取消し又は同項各号列記の事項への不適合（以下この（3）において「認定の取消し等」という。）が、申請職業訓練を行うおとする都道府県と同一の都道府県以外の区域内において行った認定職業訓練に係るものであって、当該認定の取消し等の理由となった事実及び当該事実の発生を防止するための当該認定職業訓練を行う者が当該認定の取消し等を行った責任の程度を考慮して、当該認定職業訓練を行う者が当該認定の取消し等の理由となった事実について組織的に関与していると認められない場合を除くものとし、当該認定の取消しを受けた者又は当該厚生労働大臣が認めた者が法人又は団体である場合にあつては、当該法人又は団体の役員（いかなる名称によるかを問わず、これと同等以上の職権又は支配力を有する者を含む。以下この（3）、（4）、（5）及び（15）において同じ。）又は役員であつた者を含む。）

(4) 法第四条第二項の規定により同条第一項の認定の取消しを受けた者（3）の重大な不正の行為を理由として認定の取消しを受けた者を除く。）で、当該取消しの日から起算して五年を経過しない者（当該認定の取消しが認定職業訓練に係る職務の遂行に関し不正の行為をしたことを理由とするものにあつては当該認定の取消しが申請職業訓練を行うおとする都道府県と同一の都道府県以外の区域内において行った認定職業訓練に係るものであつて、当該認定の取消しの理由となった事実及び当該事実の発生を防止するための当該認定職業訓練を行う者による取組の状況その他の当該事実に関して当該認定職業訓練を行う者が有していた責任の程度を考慮して、当該認定職業訓練を行う者が当該認定の取消し等の理由となつた事実について組織的に関与していると認められない場合を除くものとし、当該認定の取消し等の理由となった事実について組織的に関与していると認められない場合を除くものとし、当該認定の取消しが認定職業訓練に係る職務の遂行に関し不正の行為をしたこと以外を理由とするものにあつては当該認定の取消しが申請職業訓練を行うおとする都道府県と同一の

都道府県の区域において行った認定職業訓練に係るものに限るものとし、当該認定の取消しを受けた者が法人又は団体である場合にあつては、当該法人又は団体の役員又は役員であつた者を含む。）

- (5) 過去五年以内に行った認定職業訓練が法第四条第一項各号のいずれか（3）の重大な不正の行為をしたことにより厚生労働大臣が認めた者に係るものを除く。）に適合しないものと厚生労働大臣が認めた者（当該同項各号列記の事項への不適合が認定職業訓練に係る職務の遂行に関し不正の行為をしたことによるものにあつては当該同項各号列記の事項への不適合が、申請職業訓練を行うおとする都道府県と同一の都道府県以外の区域内において行った認定職業訓練に係るものであつて、当該同項各号列記の事項への不適合の理由となった事実及び当該事実の発生を防止するための当該認定職業訓練を行う者による取組の状況その他の当該事実に関して当該認定職業訓練を行う者が有していた責任の程度を考慮して、当該認定職業訓練を行う者が当該同項各号列記の事項への不適合の理由となつた事実について組織的に関与していると認められない場合を除くものとし、当該同項各号列記の事項への不適合が認定職業訓練に係る職務の遂行に関し不正の行為をしたこと以外によるものにあつては当該同項各号列記の事項への不適合が申請職業訓練を行うおとする都道府県と同一の都道府県の区域において行った認定職業訓練に係るものに限るものとし、当該厚生労働大臣が認めた者が法人又は団体である場合にあつては、当該法人又は団体の役員又は役員であつた者を含む。）
- (6) 暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律（平成三年法律第七十七号）第二条第六号に規定する暴力団員（以下この（6）において「暴力団員」という。）又は暴力団員でなくなった日から五年を経過しない者（以下この号において「暴力団員等」という。）
- (7) 暴力団員等がその事業活動を支配する者
- (8) 暴力団員等とその業務に従事させ、又は当該業務の補助者として使用するおそれのある者
- (9) 破壊活動防止法（昭和二十七年法律第二百四十号）第五条第一項に規定する暴力主義的破壊活動を行った団体及びその構成員
- (10) 風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律（昭和二十三年法律第二百二十二号）第二条第一項に規定する風俗営業又は同条第五項に規定する性風俗関連特殊営業に該当する事業を行う者及びこれらの営業に係る業務に従事する者
- (11) 会社更生法（平成十四年法律第五十四号）第十七条の規定に基づく更生手続開始の申立てが行われている者又は民事再生法（平成十一年法律第二百二十五号）第二十一条第一項の規定に基づく再生手続開始の申立てが行われている者
- (12) 精神の機能の障害により申請職業訓練を適正に行うに当たつて必要な認知、判断及び意思疎通を適切に行うことができなない者
- (13) 破産手続開始の決定を受けて復権を得ない者
- (14) 営業に関し成年者と同一の行為能力を有しない未成年者であつて、その法定代理人が（1）から（13）までのいずれかに該当するもの
- (15) 申請職業訓練を行う者が法人又は団体である場合にあつては、役員のうち（1）から（14）までのいずれかに該当する者があるもの
- (16) （1）から（15）までに掲げるもののほか、その行った認定職業訓練（申請職業訓練を行う者が過去五年以内に行ったものに限る。）に関して不適切な行為（当該不適切な行為が申請職業訓練を行うおとする都道府県と同一の都道府県の区域において行った認定職

業訓練に係るものに限る。)をしたことがある者又はその他関係法令の規定に反した等の理由により認定職業訓練を行わせることが不適切であると機構が認めた者

二 訓練の対象者 法第二条に規定する特定求職者であつて法第十二条第一項の規定により公共職業安定所長の指示を受けたものその他公共職業安定所長が認定職業訓練を受講することが適当であると認めたる求職者(以下この条及び第八条において「特定求職者等」という。)であること。ただし、実施日が特定されていない科目を含む申請職業訓練にあつては、乳児、幼児又は小学校(義務教育学校の前期課程及び特別支援学校の小学部を含む。以下同じ。)に就学している子を養育する特定求職者等その他の特に配慮を必要とする特定求職者等であつて、厚生労働省人材開発統括官が定めるものであること。

三 教科 次のいずれにも該当するものであること。

イ その科目が就職に必要な技能及びこれに関する知識を十分に有していない者の職業能力の開発及び向上を図るために効果的なものであること。

ロ 次のいずれにも該当しないものであること。

(1) 社会通念上、職業能力の開発及び向上に相当程度資するものであると認められないもの

(2) 当該教科に係る知識及び技能の習得が、特定求職者の段階的に安定した雇用に結びつくことが期待し難いと認められるもの

(3) 法令に基づく資格等に関するものその他の特定求職者の就職に資するものとして適当でないと思われるもの

四 訓練の実施方法 通信の方法によつても行うことができること。この場合には、適切と認められる方法により、必要に応じて添削指導若しくは面接指導又はその両方を行うこと。

五 訓練期間 次に掲げる申請職業訓練の区分に応じ、それぞれ次に定める範囲内において適切な期間であること。

イ 基礎訓練 二月以上四月以下

ロ 実践訓練 二月以上六月以下

六 訓練時間 次のイ及びロに掲げる申請職業訓練の区分に応じ、当該イ及びロに定める範囲内であること。

イ 基礎訓練 一月につき百時間以上であり、かつ、一日につき原則として五時間以上六時間以下(在職中の特定求職者等その他の特に配慮を必要とする特定求職者等に対して行う申請職業訓練にあつては、一月につき八十時間以上であり、かつ、一日につき原則として三時間以上六時間以下)

ロ 実践訓練 次の(1)及び(2)に掲げる実践訓練の区分に応じ、当該(1)及び(2)に定める範囲内であること。

(1) 実施日が特定されていない科目を含まない実践訓練 一月につき八十時間以上であり、かつ、一日につき原則として三時間以上六時間以上

(2) 実施日が特定されていない科目を含む実践訓練 一月につき八十時間以上

七 施設及び設備 教科の科目に応じて当該科目の職業訓練を適切に行うことができると認められるものであること。

八 教材 申請職業訓練の内容と整合しており、かつ、適正な費用の教材を使用すること。

九 受講者の数 申請職業訓練を行う一単位につきおおむね十人からおおむね三十人までであること。

十 訓練受講に係る費用 入学科(受講の開始に際し納付する料金をいう。)及び受講料が無料であること。また、申請職業訓練を受講する特定求職者等が所有することとなる教科書その他の教材等に係る費用としてあらかじめ明示したものを除き、無料であること。

十一 講師 教科の科目に応じ当該科目の職業訓練を効果的に指導できる専門知識、能力及び経験を有する者であつて、申請職業訓練を適正に運営することができるが、かつ、担当する科目の内容について指導等の業務に従事した十分な経験を有するものであること。

十二 実習 実習を含む申請職業訓練にあつては、当該実習が次のいずれにも該当すること。

イ 当該実習が行われる事業所の事業主が行う業務の遂行の過程内における実務を通じた実践的な技能及びこれに関する知識の習得に係る実習であること。

ロ 当該実習が行われる事業所の事業主と当該実習を受ける特定求職者等との雇用関係を伴わないものであること。

ハ 当該実習が行われる事業所において、実習指導者、訓練評価者及び管理責任者を配置していること。

ニ 安全衛生に関する技能及びこれに関する知識の習得を目的とした実習を含むものであること。

ホ 当該実習を受ける特定求職者等の安全衛生その他の作業条件について、労働基準法(昭和二十二年法律第四十九号)及び労働安全衛生法(昭和四十七年法律第五十七号)の規定に準ずる取扱いをするものであること。

ヘ 当該実習が行われる事業所の事業主及び従業員が、第一号りに該当するものであること。

十三 習得された技能及びこれに関する知識の評価 特定求職者等が申請職業訓練を受ける期間において一月に少なくとも一回、当該申請職業訓練を受講することにより習得された技能及びこれに関する知識の適正な評価を行うとともに、当該申請職業訓練の終了前においても、当該申請職業訓練を受講することにより習得された技能及びこれに関する知識の適正な評価を行うこと。この場合において、これらの評価(以下この号において「習得度評価」という。)の内容を、ジョブ・カード(職業能力開発促進法第十五条の四第一項に規定する職務経歴等記録書をいう。第十五号ロ(7)において同じ。)に記載しなければならない。

十四 キャリアコンサルティングの実施 キャリアコンサルティング担当者(職業能力開発促進法第十五条の四第一項に規定する職務経歴等記録書を用いたキャリアコンサルティング(職業能力開発促進法第二条第五項のキャリアコンサルティングをいう。)を行う者であつて厚生労働大臣が定めるものをいう。以下この号において同じ。)を申請職業訓練を行う施設内に配置し、当該申請職業訓練を受講する特定求職者等に、当該キャリアコンサルティング担当者が行うキャリアコンサルティングを当該申請職業訓練の期間内に三回以上(特定求職者等が申請職業訓練を受ける期間が三月に満たない場合にあつては、一月に少なくとも一回以上)受けさせること。

十五 就職の支援 申請職業訓練を受講する特定求職者等の就職の支援のため、次に掲げる措置を講ずること。

イ ロに掲げる申請職業訓練を受講する特定求職者等の就職の支援に関する措置に係る責任者を配置すること。

ロ 申請職業訓練を受講する特定求職者等の就職の支援に関する措置として、次に掲げるものを行うこと。

(1) 職業相談

(2) 求人情報の提供

(3) 履歴書の作成に係る指導

(4) 公共職業安定所が行う就職説明会の周知

(5) 公共職業安定所への訪問指示

(6) 求人者に面接するに当たつての指導

(7) ジョブ・カードの作成の支援

(8) その他申請職業訓練を受講する特定求職者等の就職の支援のため必要な措置

十六 報告 申請職業訓練の終了後に、就職した又は自営業者となつた修了者の数、就職理由退校者の数その他の就職に関する状況に係る報告書の提出を、機構に対して適切に行うこと。

励金支給単位期間における当該実践訓練の実施日数に占める割合（実施日が特定されていない科目を含む実践訓練にあつては、当該実践訓練を受講した時間数の基本奨励金支給単位期間における当該実践訓練を行う者が定める時間数に占める割合）が百分の八十以上の基本奨励金支給単位期間の数）を乗じて得た額

口 基本奨励金支給単位期間における日数が二十八日未満である基本奨励金支給単位期間 当該実践訓練を受講した特定求職者等一人につき二千五百円に当該基本奨励金支給単位期間における当該実践訓練の実施日数（実施日が特定されていない科目を含む実践訓練にあつては、当該基本奨励金支給単位期間における日数から日曜日、土曜日及び国民の祝日に関する法律（昭和二十三年法律第七十八号）に規定する休日（以下この条及び第十一条において「日曜日等」という。）の日数を減じた日数）を乗じて得た額（その額が五万円を超える場合にあっては、五万円）

3 認定職業訓練実施基本奨励金は、連続する三の基本奨励金支給単位期間（当該連続する三の基本奨励金支給単位期間の末日の翌日から認定職業訓練が終了した日までの連続する基本奨励金支給単位期間の数に満たない場合は、当該連続する基本奨励金支給単位期間。以下この項において「基本奨励金支給対象期間」という。）ごとに、前項の規定に基づき当該基本奨励金支給対象期間について支給すべき額として算定した額を支給するものとする。この場合において、当該認定職業訓練を行う者が当該認定職業訓練を適切に終了させた場合においては、当該認定職業訓練を行った者が希望する場合には限り、基本奨励金支給対象期間ごとの認定職業訓練実施基本奨励金の支給に代えて、前項の規定に基づき当該認定職業訓練の全ての基本奨励金支給単位期間について支給すべき額として算定した額の認定職業訓練実施基本奨励金の支給を行うことができるものとする。

4 認定職業訓練実施付加奨励金は、第一号に該当する者に対して、第二号に定める額を支給するものとする。

一 実践訓練に係る認定職業訓練実施基本奨励金を受けた者であつて、当該実践訓練の就職率が次号イ又はロに掲げる率に該当する実践訓練を行ったもの

二 次のイ及びロに掲げる就職率の区分に応じ、当該イ及びロに定める額
イ 百分の三十五以上百分の六十未満 次の（一）及び（二）に掲げる付加奨励金支給単位期間（実践訓練の期間を当該実践訓練が開始された日又は開始当日から各翌月の開始当日の前日（当該実践訓練が終了した日の属する月にあつては、同日）までの各期間に区分した場合における当該区分による一の期間をいう。以下この号において同じ。）の区分に応じ、それぞれ（一）及び（二）に定める額を合算した額

（一）（二）に掲げる付加奨励金支給単位期間以外の付加奨励金支給単位期間 当該実践訓練に係る修了者等一人につき一万円に当該実践訓練の付加奨励金支給単位期間の数を乗じて得た額

（2）付加奨励金支給単位期間における日数が二十八日未満である付加奨励金支給単位期間 当該実践訓練に係る修了者等一人につき五百円に当該付加奨励金支給単位期間における当該実践訓練の実施日数（実施日が特定されていない科目を含む実践訓練にあつては、当該付加奨励金支給単位期間における日数から日曜日等の日数を減じた日数。ロ（2）において同じ。）を乗じて得た額（その額が一万円を超える場合にあっては、一万円）
ロ 百分の六十以上 次の（一）及び（二）に掲げる付加奨励金支給単位期間の区分に応じ、それぞれ（一）及び（二）に定める額を合算した額

（1）（2）に掲げる付加奨励金支給単位期間以外の付加奨励金支給単位期間 当該実践訓練に係る修了者等一人につき二万円に当該実践訓練の付加奨励金支給単位期間の数を乗じて得た額

（2）付加奨励金支給単位期間における日数が二十八日未満である付加奨励金支給単位期間 当該実践訓練に係る修了者等一人につき千円に当該付加奨励金支給単位期間における当該実践訓練の実施日数を乗じて得た額（その額が二万円を超える場合にあっては、二万円）

5 訓練施設内保育実施奨励金は、第一号に該当する者に対して、第二号に定める額を支給するものとする。

一 認定職業訓練を行う者であつて、特定求職者等が小学校就学の始期に達するまでの子を養育しつつ就業することを容易にするための施設として適当と認められる保育施設を運営する事業を自ら行い、又は他者に委託して行うものであること。

二 特定求職者等が養育する小学校就学の始期に達するまでの子について、全ての基本奨励金支給単位期間中の保育を行う事業に要した経費の額（一の基本奨励金支給単位期間について、特定求職者等が養育する小学校就学の始期に達するまでの子一人につき六万六千円を限度とする。）

（調整）

第八条の二 認定職業訓練実施奨励金の支給を受けることができる認定職業訓練を行う者が、同一の事由により、国から次に掲げる事業に要する費用に相当する金額の支給を受けた場合その他これに類する場合には、当該支給事由によつては、認定職業訓練実施奨励金は支給しないものとする。

一 雇用保険法施行規則（昭和五十年労働省令第三号）第三百三十一条に規定する介護労働講習
二 雇用保険法施行規則第四百十条第一号ロ及びハ並びに第二号ロ及びハに掲げる事業
三 雇用保険法施行規則第四百十条の二第一項に規定する地域活性化雇用創造プロジェクト
四 その他厚生労働大臣が定める事業

（労働保険料滞納事業主等に対する不支給）

第九条 第八条第二項及び第四項の規定にかかわらず、認定職業訓練実施奨励金は、労働保険料の納付の状況が著しく不適切である、過去に重大な不正の行為若しくは過去五年以内に偽りその他不正の行為（当該重大な不正の行為又は不正の行為が、当該職業訓練実施奨励金に係る認定職業訓練を行った都道府県と同一の都道府県以外の区域内において行った認定職業訓練に係るものであつて、当該重大な不正の行為又は不正の行為の事実及び当該事実の発生を防止するための当該認定職業訓練を行う者による取組の状況その他の当該事実に関して当該認定職業訓練を行う者が有していた責任の程度を考慮して、当該認定職業訓練を行う者が当該重大な不正の行為又は不正の行為の事実について組織的に関与していると認められない場合を除く。）により、認定職業訓練実施基本奨励金若しくは認定職業訓練実施付加奨励金の支給を受け、若しくは受けようとした、又は過去五年以内に偽りその他不正の行為により、雇用保険法施行規則第二百二条の二に規定する雇用調整助成金その他の雇用保険法第四章の規定により支給される給付金の支給を受け、若しくは受けようとした認定職業訓練を行う者に対しては、その全部又は一部を支給しないものとする。

第二章 職業訓練受講給付金

（職業訓練受講給付金の種類）

第十条 法第七条第一項に規定する職業訓練受講給付金は、職業訓練受講手当、通所手当及び寄宿手当とする。

（職業訓練受講手当）

第十一条 職業訓練受講手当は、法第十二条第一項の規定により公共職業安定所長が指示した認定職業訓練等（法第七条第一項に規定する認定職業訓練等をいう。以下同じ。）を受け、特定求職者等が、給付金支給単位期間（認定職業訓練等の期間を、当該認定職業訓練等が開始された日又は各月においてその日に応じ、かつ、当該認定職業訓練等の期間内にある日（その日に応じ又は各翌月の訓練開始当日の前日（当該認定職業訓練等が終了した日（同日前）にやむを得ない理由により当該認定職業訓練等の受講を取りやめた者にあつては、当該認定職業訓練等が終了した日））までの各期間に区分した場合における当該区分による一の期間をいう。以下同じ。）において

て次の各号のいずれにも該当するときに、当該給付金支給単位期間について支給するものとする。

一 当該特定求職者の収入の額が八万円以下であること。

二 当該特定求職者並びに当該特定求職者と同居の又は生計を一にする別居の配偶者（婚姻の届出をしていないが、事実上婚姻関係と同様の事情にある者を含む。）、子及び父母（以下「配偶者等」という。）の収入の額を合算した額が三十万円以下であること。

三 当該特定求職者並びに当該特定求職者と同居の又は生計を一にする別居の配偶者等の所有する金融資産の合計額が三百万円以下であること。

四 当該特定求職者が現に居住している土地及び建物以外に、土地及び建物を所有していないこと。

五 実施日が特定されていない科目を含まない認定職業訓練等にあつては、当該認定職業訓練等の全ての実施日に当該認定職業訓練等を受講していること。ただし、やむを得ない理由により受講しなかった当該認定職業訓練等の実施日がある場合（やむを得ない理由以外の理由により受講しなかった当該認定職業訓練等の実施日がある場合を除く。）にあつては、当該認定職業訓練等を受講した日数（やむを得ない理由により当該認定職業訓練等の一実施日における訓練の部分の一部のみを受講した日（当該認定職業訓練等の一実施日における訓練の部分の二分の一以上に相当する部分を受講した日に限る。以下この号において同じ。）がある場合にあつては、当該認定職業訓練等を受講した日数に当該一部のみを受講した日数に二分の一を乗じて得た日数を加えた日数（一日未満の端数があるときは、これを切り捨てた日数）の当該認定職業訓練等の実施日数に占める割合が百分の八十以上であること。

六 乳児、幼児又は小学校に就学している子を養育する特定求職者、育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律（平成三年法律第七十六号）第二条第四号に規定する対象家族を介護する特定求職者その他厚生労働省職業安定局長（以下「職業安定局長」という。）が定める特定求職者（以下「養育・介護中等の特定求職者」という。）が実施日が特定されていない科目を含まない認定職業訓練等を受講した場合にあつては、前号の規定にかかわらず、当該認定職業訓練等を受講した日数（当該認定職業訓練等の一実施日における訓練の部分の一部のみを受講した日（当該認定職業訓練等の一実施日における訓練の部分の二分の一以上に相当する部分を受講した日に限る。以下この号において同じ。）がある場合にあつては、当該認定職業訓練等を受講した日数に当該一部のみを受講した日数に二分の一を乗じて得た日数を加えた日数（一日未満の端数があるときは、これを切り捨てた日数）の当該認定職業訓練等の実施日数に占める割合が百分の八十以上であること。

七 実施日が特定されていない科目を含む認定職業訓練等にあつては、当該認定職業訓練等を行う者が定める時間数当該認定職業訓練等を受講していること。ただし、やむを得ない理由により受講しなかった時間数がある場合（実施日が特定されていない科目を受講しなかった時間数が、当該認定職業訓練等を行う者が定める実施日が特定されていない科目の時間数を、給付金支給単位期間の日数から日曜日等の日数を減じた日数で除して得た時間数に、実施日が特定されていない科目を受講しなかったことにつきやむを得ない理由のある日数を乗じて得た時間数を超える場合を除く。）にあつては、当該認定職業訓練等を受講した時間数の当該認定職業訓練等を行う者が定める時間数に占める割合が百分の八十以上であること。

八 養育・介護中等の特定求職者が実施日が特定されていない科目を含む認定職業訓練等を受講した場合にあつては、前号の規定にかかわらず、当該認定職業訓練等を受講した時間数の当該認定職業訓練等を行う者が定める時間数に占める割合が百分の八十以上であること。

九 当該特定求職者と同居の又は生計を一にする別居の配偶者等が、職業訓練受講手当の支給を受けた認定職業訓練等を受講していないこと。

十 過去三年以内に偽りその他不正の行為により、雇用保険法第十条第一項に規定する失業等給付、同法第六十一条の六第一項に規定する育児休業給付若しくは同法第四章の規定により支給される給付金又は労働施策の総合的な推進並びに労働者の雇用の安定及び職業生活の充実等に

関する法律（昭和四十一年法律第三百二十二号）第十八条に規定する職業転換給付金若しくは職業転換給付金に相当する給付金その他職業訓練を受けることを容易にするための給付金であつて職業安定局長が定めるものの支給を受けたことがないこと。

二 職業訓練受講手当の額は、次の各号に掲げる給付金支給単位期間の区分に応じ、当該各号に定める額とする。

一 次号に掲げる給付金支給単位期間以外の給付金支給単位期間 十万円
二 給付金支給単位期間における日数（当該給付金支給単位期間内に次のイからハまでに掲げる日数がある場合にあつては、当該日数）が二十八日未満である給付金支給単位期間 三千五百八十円に当該給付金支給単位期間における日数を乗じて得た額

イ 認定職業訓練等を受講する者が雇用保険法第十五条第一項に規定する受給資格者その他これに類する者（国家公務員退職手当法（昭和二十八年法律第八十二号）第十条の規定による退職手当その他これに準ずる他の法令、条例、規則等に基づく退職手当の支給を受けることができるものをいう。）でなくなった日、当該認定職業訓練等を受講する者と同居の若しくは生計を一にする別居の配偶者等が職業訓練受講給付金の支給を受けた認定職業訓練等の受講を終了した日の翌日又は当該認定職業訓練等を受講する者が第十三条の規定により職業訓練受講給付金を支給しないこととされる特定求職者でなくなった日（ハにおいて「受給資格者でなくなった日等」という。）がある場合にあつては、当該日（これらの日が複数ある場合には、そのうち最も遅い日）から当該給付金支給単位期間の末日（次項又は第四項の規定により、十二又は二十四の給付金支給単位期間に達した日を含む給付金支給単位期間にあつては、当該達した日）までの日数
ロ 当該認定職業訓練等を受講する者が雇用保険法第四条第一項に規定する被保険者となった日がある場合にあつては、当該給付金支給単位期間の初日から当該被保険者となった日の前日（次項又は第四項の規定により、十二又は二十四の給付金支給単位期間に達した日を含む給付金支給単位期間にあつては、当該達した日。ハにおいて同じ。）までの日数
ハ 当該認定職業訓練等を受講する者が受給資格者でなくなった日等があり、かつ、当該受給資格者でなくなった日等（これらの日が複数ある場合には、そのうち最も遅い日）の後に雇用保険法第四条第一項に規定する被保険者となった日がある場合にあつては、当該受給資格者でなくなった日等から当該被保険者となった日の前日までの日数

三 職業訓練受講手当は、一の認定職業訓練等について、十二（公共職業安定所長が必要があると認める場合は、二十四。次項において同じ。）の給付金支給単位期間分を限度として支給する。この場合において、当該認定職業訓練等に係る給付金支給単位期間のうち、職業訓練受講手当の支給を受けた前項第二号に掲げる給付金支給単位期間が複数ある場合であつて当該複数の給付金支給単位期間における日数を合算した日数が二十八日以下の場合には、その給付金支給単位期間数にかかわらず、一の給付金支給単位期間分の職業訓練受講手当を支給したものとみなす。

四 連続受講に係る職業訓練受講手当は、前項の規定にかかわらず、当該連続受講に係る認定職業訓練等について、合わせて十二の給付金支給単位期間分を限度として支給する。この場合において、当該連続受講に係る認定職業訓練等に係る給付金支給単位期間のうち、職業訓練受講手当の支給を受けた第二号に掲げる給付金支給単位期間が複数ある場合は、厚生労働大臣の定めるところにより、当該複数の給付金支給単位期間における日数を合算した日数に応じて、一又は複数の給付金支給単位期間分の職業訓練受講手当を支給したものとみなす。

五 養育・介護中等の特定求職者が実施日が特定されていない科目を含まない認定職業訓練等を受講した場合にあつては、やむを得ない理由以外の理由により認定職業訓練等を受講しなかった実施日がある場合の職業訓練受講手当の額は、第二項の規定にかかわらず、同項の規定による額から、当該認定職業訓練を受講しなかった実施日の日数（以下「欠席日数」という。）のその給付金支給単位期間の現日数に占める割合を同項の規定に乗じて得た額を減じた額とする。この場合において、当該認定職業訓練等の一実施日における訓練の部分の一部を受講しなかった

日(当該認定職業訓練等の一実施日における訓練の部分の二分の一未満に相当する部分を受講しなかつた日に限る。)があるときは、欠席日数は、当該認定職業訓練等を受講しなかつた日数に当該一部を受講しなかつた日数に二分の一を乗じて得た日数を加えた日数(一日未満の端数があるときは、これを切り上げた日数)とする。

6 養育・介護中等の特定求職者が実施日が特定されていない科目を含む認定職業訓練等を受講した場合にあっては、やむを得ない理由以外の理由により認定職業訓練等を受講しなかつた時間数がある場合の職業訓練受講手当の支給の額は、第二項の規定にかかわらず、同項の規定による額から、その時間数のその給付金支給単位期間において当該認定職業訓練等を行う者が定める時間数に占める割合を同項の規定による額に乗じて得た額を減じた額とする。

(通所手当)

第十二条 通所手当は、法第十二条第一項の規定により公共職業安定所長が指示した認定職業訓練等を受ける特定求職者が、前条第一項第一号中「八万円」とあるのは「十二万円」と、同項第二号中「三十万円」とあるのは「三十四万円」と読み替えた場合に同項各号のいずれにも該当する場合であつて、給付金支給単位期間において、次の各号のいずれかに該当するときに、当該給付金支給単位期間について支給するものとする。

一 特定求職者の住所又は居所から認定職業訓練等を行う施設(附則第四条の二において「訓練等施設」という。)への通所(以下この条において「通所」という。)のため、交通機関又は有料の道路(以下この条及び附則第四条の二第二項において「交通機関等」という。)を利用してその運賃又は料金(以下この条及び附則第四条の二第二項において「運賃等」という。)を負担する者を常例とする者(交通機関等を利用しなかつた通所するものが著しく困難である者以外の者であつて、交通機関等を利用しないが著しく困難である者)及び第三号に該当する距離が片道二キロメートル未満であるもの及び第三号に該当する距離が片道二キロメートル未満であるもの及び第三号に該当する者(以下この条及び附則第四条の二第二項において「自動車等」という。)を使用することを常例とする者(自動車等を使用しなかつた通所するものが著しく困難である者以外の者であつて、自動車等を使用しないが著しく困難である者)及び次号に該当する者(以下この条及び附則第四条の二第二項において「通所」という。)

二 通所のため自動車その他の交通の用具(以下この条及び附則第四条の二第二項において「自動車等」という。)を使用することを常例とする者(自動車等を使用しなかつた通所するものが著しく困難である者以外の者であつて、自動車等を使用しないが著しく困難である者)及び次号に該当する者(以下この条及び附則第四条の二第二項において「通所」という。)

三 通所のため交通機関等を利用してその運賃等を負担し、かつ、自動車等を使用することを常例とする者(交通機関等を利用せず、かつ、自動車等を使用しなかつた通所するものが著しく困難な者以外の者であつて、交通機関等を利用せず、かつ、自動車等を使用しなかつた通所するものが著しく困難な者)及び次号に該当する者(以下この条及び附則第四条の二第二項において「通所」という。)

四 通所手当の給付金支給単位期間当たりの額は、次の各号に掲げる特定求職者の区分に応じ、当該各号に定める額とする。ただし、その額が四万二千五百円を超えるときは、四万二千五百円とする。

一 前項第一号に該当する者 次項及び第四項に定めるところにより算定したその者の当該給付金支給単位期間の通所に要する運賃等の額(以下この条において「運賃等相当額」という。)

二 前項第二号に該当する者 自動車等を使用する距離が片道十キロメートル未満である者にあつては三千六百九十円、その他の者にあつては五千八百五十円(厚生労働大臣の定める地域(以下この条及び附則第四条の二第二項第一号ロにおいて「指定地域」という。)に居住する者であつて自動車等を使用する距離が片道十五キロメートル以上であるものにあつては、八千十円)

三 前項第三号に該当する者(交通機関等を利用しなかつた通所するものが著しく困難である者以外の者であつて、通常徒歩によることが例である距離内においてのみ交通機関等を利用しているものを除く。)のうち、自動車等を使用する距離が片道二キロメートル以上である者又はその距離が片道二キロメートル未満であるが自動車等を使用しなかつた通所するものが著しく困難である者 第一号に定める額と前号に定める額との合計額

四 前項第三号に該当する者(前号に掲げる者を除く。)のうち、運賃等相当額が第二号に定める額以上である者 第一号に定める額

五 前項第三号に該当する者(第三号に掲げる者を除く。)のうち、運賃等相当額が第二号に定める額未満である者 第二号に定める額

3 運賃等相当額の算定は、運賃、時間、距離等の事情に照らし、最も経済的かつ合理的と認められる通常の通所の経路及び方法による運賃等の額によつて行うものとする。

4 運賃等相当額は、次の各号による額の総額とする。

一 交通機関等が定期乗車券(これに準ずるものを含む。次号において同じ。)を発行している場合は、当該交通機関等の利用区間に係る通用期間一箇月の定期乗車券の価額(価額の異なる定期乗車券を発行しているときは、最も低廉となる定期乗車券の価額)

二 交通機関等が定期乗車券を発行していない場合は、当該交通機関等の利用区間についての通所二十一回分の運賃等の額であつて、最も低廉となるもの

5 前条第二項第二号に掲げる給付金支給単位期間の通所手当の額は、第二項の規定にかかわらず、当該給付金支給単位期間における日数を二十八で除して得た割合を同項の規定による額に乗じて得た額とする。

6 通所を常例としない認定職業訓練等を受講する場合の通所手当の給付金支給単位期間当たりの額は、前五項の規定にかかわらず、次の各号に掲げる受給資格者の区分に応じて、当該各号に定める額とする。ただし、その額が四万二千五百円を超えるときは、四万二千五百円とする。

一 通所のため、交通機関等を利用してその運賃等を負担する者(交通機関等を利用しなかつた通所するものが著しく困難である者以外の者であつて、交通機関等を利用しないが著しく困難である者)及び第三号に該当する者(以下この条及び附則第四条の二第二項において「通所」という。)

二 通所のため自動車等を使用する者(自動車等を使用しなかつた通所するものが著しく困難である者以外の者であつて、自動車等を使用しないが著しく困難である者)及び次号に該当する者(以下この条及び附則第四条の二第二項において「通所」という。)

三 通所のため交通機関等を利用してその運賃等を負担し、かつ、自動車等を使用する者(交通機関等を利用し、又は自動車等を使用しなかつた通所するものが著しく困難である者以外の者であつて、交通機関等を利用せず、かつ、自動車等を利用しないが著しく困難である者)及び次号に該当する者(以下この条及び附則第四条の二第二項において「通所」という。)

四 通所のため交通機関等を利用してその運賃等を負担し、かつ、自動車等を使用する者(交通機関等を利用し、又は自動車等を使用しなかつた通所するものが著しく困難である者)及び次号に該当する者(以下この条及び附則第四条の二第二項において「通所」という。)

五 通所のため交通機関等を利用してその運賃等を負担し、かつ、自動車等を使用する者(交通機関等を利用し、又は自動車等を使用しなかつた通所するものが著しく困難である者)及び次号に該当する者(以下この条及び附則第四条の二第二項において「通所」という。)

7 前項に規定する運賃等の額は、運賃、時間、距離等の事情に照らし、最も経済的かつ合理的と認められる通常の通所の経路及び方法による運賃等の額とする。

8 養育・介護中等の特定求職者が実施日が特定されていない科目を含まない認定職業訓練等を受講した場合にあっては、やむを得ない理由以外の理由により認定職業訓練等を受講しなかつた実施日がある場合の第二項に規定する通所手当の額は、同項の規定にかかわらず、同項の規定による額から、欠席日数のその給付金支給単位期間の現日数に占める割合を同項の規定による額に乗じて得た額を減じた額とする。

9 養育・介護中等の特定求職者が実施日が特定されていない科目を含む認定職業訓練等を受講した場合にあっては、やむを得ない理由以外の理由により当該認定職業訓練等を受講しなかつた日

がある場合の第六項に規定する通所手当の額は、同項の規定にかかわらず、同項の規定による額から、欠席日数のその給付金支給単位期間において当該認定職業訓練等を行う者が通所により受講すべき日として定める日数に占める割合を同項の規定による額に乗じて得た額を減じた額とする。

10 通所手当は、一の認定職業訓練等について、十二（公共職業安定所長が特に必要があると認める場合は、二十四。次項において同じ。）の給付金支給単位期間分を限度として支給する。この場合において、当該認定職業訓練等に係る給付金支給単位期間のうち、通所手当の支給を受けた前条第二項第二号に掲げる給付金支給単位期間が複数ある場合であつて当該複数の給付金支給単位期間における日数を合算した日数が二十八日以下の場合には、その給付金支給単位期間数にかかわらず、一の給付金支給単位期間分の通所手当を支給したものとみなす。

11 連続受講に係る通所手当は、前項の規定にかかわらず、当該連続受講に係る認定職業訓練等について、合わせて十二の給付金支給単位期間分を限度として支給する。この場合において、当該連続受講に係る認定職業訓練等に係る給付金支給単位期間のうちに通所手当の支給を受けた前条第二項第二号に掲げる給付金支給単位期間が複数ある場合は、厚生労働大臣の定めるところにより、当該複数の給付金支給単位期間における日数を合算した日数に応じて、一又は複数の給付金支給単位期間分の通所手当を支給したものとみなす。

（寄宿手当）
第十二条の二 寄宿手当は、職業訓練受講手当の支給を受ける特定求職者が、当該支給を受ける給付金支給単位期間において、法第十二条第一項の規定により公共職業安定所長が指示した認定職業訓練等を受けるため、同居の配偶者等と別居して寄宿している場合に、当該配偶者等と別居して寄宿していた期間について、支給するものとする。

2 寄宿手当の額は、次の各号に掲げる給付金支給単位期間の区分に応じ、当該各号に定める額とする。
一 第十一条第二項第一号に掲げる給付金支給単位期間 一万七千七百円
二 第十一条第二項第二号に掲げる給付金支給単位期間 当該給付金支給単位期間における日数を二十八で除して得た割合を一万七千七百円に乗じて得た額

3 特定求職者が配偶者等と別居して寄宿していない日がある場合の寄宿手当の額は、前項の規定にかかわらず、同項の規定による額から、その日数のその給付金支給単位期間の現日数に占める割合を同項の規定による額に乗じて得た額を減じた額とする。

4 養育・介護中等の特定求職者が実施日が特定されていない科目を含まない認定職業訓練等を受講した場合にあつては、やむを得ない理由以外の理由により認定職業訓練等を受講しなかった実施日がある場合の寄宿手当の額は、前二項の規定にかかわらず、これらの規定による額から、欠席日数のその給付金支給単位期間の現日数に占める割合をこれらの規定による額に乗じて得た額を減じた額とする。

5 養育・介護中等の特定求職者が実施日が特定されていない科目を含む認定職業訓練等を受講した場合にあつては、やむを得ない理由以外の理由により当該認定職業訓練等を受講しなかった日がある場合の寄宿手当の額は、第二項及び第三項の規定にかかわらず、これらの規定による額から、欠席日数のその給付金支給単位期間において養育・介護中等の特定求職者が認定職業訓練等を受講するために寄宿する必要がある日数に占める割合をこれらの規定による額に乗じて得た額を減じた額とする。

（六年以内に職業訓練受講給付金の支給を受けた特定求職者への不支給）
第十三条 現に受講している認定職業訓練等の直前の職業訓練受講給付金の支給を受けた認定職業訓練等（当該認定職業訓練等が連続受講に係る実践訓練又は公共職業訓練であつて、当該連続受講に係る基礎訓練及び実践訓練又は基礎訓練及び公共職業訓練のいずれについても職業訓練受講給付金の支給を受けた実践訓練又は公共職業訓練である場合にあつては、当該基礎訓練）（当該認定職業訓練等が当該認定職業訓練等が終了した日以前にやむを得ない理由により受講を取りやめた認定職業訓練等である場合にあつては、当該認定職業訓練等が連続受講

に係る実践訓練又は公共職業訓練であつて、当該連続受講に係る基礎訓練及び実践訓練又は基礎訓練及び公共職業訓練のいずれについても職業訓練受講給付金の支給を受けた実践訓練又は公共職業訓練である場合にあつては、当該基礎訓練及び当該実践訓練又は当該基礎訓練及び当該公共職業訓練）及び当該認定職業訓練等が連続受講に係る基礎訓練であつて、当該連続受講に係る実践訓練又は公共職業訓練が当該実践訓練又は当該公共職業訓練が終了した日以前にやむを得ない理由により受講を取りやめた実践訓練又は公共職業訓練である場合にあつては、当該基礎訓練を除く。）について、当該職業訓練受講給付金の支給を受けた最初の給付金支給単位期間の初日から六年を経過しない特定求職者には、第十一条第一項、第十二条第一項及び前条第一項の規定にかかわらず、職業訓練受講給付金を支給しない。ただし、現に受講している認定職業訓練等が連続受講に係る実践訓練又は公共職業訓練であつて、当該連続受講に係る基礎訓練について職業訓練受講給付金の支給を受けた場合は、この限りでない。

（法第十二条の規定による公共職業安定所長の指示に従わない特定求職者への不支給）
第十四条 特定求職者が、正当な理由がなく、法第十二条第一項の規定による公共職業安定所長の指示に従わなかったときは、第十一条第一項、第十二条第一項及び第十二条第二項の規定にかかわらず、その従わなかった日の属する給付金支給単位期間以後、職業訓練受講給付金を支給しない。

2 前項に規定する特定求職者が法第十二条第一項の規定により公共職業安定所長が新たに指示した認定職業訓練等を受講する場合には、前項の規定にかかわらず、職業訓練受講給付金を支給する。
3 第一項の規定により職業訓練受講給付金の支給を受けることができなくなった特定求職者が受講していた認定職業訓練等に係る前条の規定の適用については、職業訓練受講給付金の支給を受けた認定職業訓練等とみなす。

（不正受給者への不支給）
第十五条 偽りその他不正の行為により職業訓練受講給付金の支給を受け、又は受けようとした者には、第十一条第一項、第十二条第一項及び第十二条第二項の規定にかかわらず、当該職業訓練受講給付金の支給を受け、又は受けようとした日の属する給付金支給単位期間以後、職業訓練受講給付金を支給しない。

2 前項に規定する者が法第十二条第一項の規定により公共職業安定所長が新たに指示した認定職業訓練等を受講する場合には、前項の規定にかかわらず、職業訓練受講給付金を支給する。
3 第一項の規定により職業訓練受講給付金の支給を受けることができなくなった者の受講していた認定職業訓練等に係る第十三条の規定の適用については、職業訓練受講給付金の支給を受けた認定職業訓練等とみなす。この場合において、同条（見出しを含む）中「六年」とあるのは「九年」とする。

（職業訓練受講手当の支給を受ける特定求職者に対する貸付けに係る保証を行う一般社団法人等への補助）
第十六条 第十条に規定するもののほか、職業訓練受講手当の支給を受ける特定求職者の認定職業訓練等の受講を容易にするための資金の貸付けに係る保証を行う一般社団法人又は一般財団法人に対して、当該保証に要する経費の一部補助を行うものとする。

（職業訓練受講給付金の支給手続）
第十七条 職業訓練受講給付金の支給を受けようとする特定求職者は、当該職業訓練受講給付金の支給に係る給付金支給単位期間が終了した日の翌日から一月以内で当該特定求職者の住所又は居所を管轄する公共職業安定所（以下「管轄公共職業安定所」という。）の長の指定する日に当該管轄公共職業安定所に出頭し、職業訓練受講給付金支給申請書（様式第三号）に第二十一条第二項に規定する就職支援計画書（様式第四号）その他厚生労働省職業安定局長が定める書類を添えて提出しなければならない。

(職業訓練受講給付金の返還等)

第十八条 法第八条第一項又は第二項の規定により返還又は納付を命ぜられた金額を徴収する場合には、都道府県労働局労働保険特別会計歳入徴収官(次条において「歳入徴収官」という。)は、納期限を指定して納入の告知をしなければならない。

2 前項の規定による納入の告知を受けた者は、その指定された納期限までに、当該納入の告知に係る金額を日本銀行(本店、支店、代理店及び歳入代理店をいう。)又は都道府県労働局労働保険特別会計収入官吏(第二十条において「収入官吏」という。)に納入しなければならない。

第十九条 歳入徴収官は、法第八条第三項において準用する徴収法第二十七条第二項の規定により督促状を発するときは、同条第一項の規定により十四日以内の期限を指定しなければならない。

第二十条 法第八条第三項において準用する徴収法第二十七条第三項の規定により滞納処分のため財産差押えをする収入官吏は、その身分を示す証明書(様式第五号)を携帯し、関係者に提示しなければならない。

第三章 就職支援計画書の作成等

(就職支援計画書の作成)

第二十一条 管轄公共職業安定所の長は、法第十一条の規定による就職支援計画を作成した場合には、法第十二条第一項の規定による指示と併せて、特定求職者に対し、これを交付しなければならない。

2 前項の就職支援計画は、次に掲げる事項を記載した就職支援計画書によるものとする。

- 一 当該特定求職者が受講する認定職業訓練等
- 二 当該特定求職者が受ける職業指導及び職業紹介
- 三 前号の措置を受けるために当該特定求職者が管轄公共職業安定所に出頭すべき日
- 四 前三号に掲げるもののほか、特定求職者の就職を容易にするために必要な事項

(法第十一条第三号の厚生労働省令で定めるもの)

第二十二条 法第十一条第三号の厚生労働省令で定めるものは、認定職業訓練を行う者による就職の支援に関する措置とする。

(氏名変更等の届出)

第二十三条 就職支援計画書の交付を受けた特定求職者は、その氏名又は住所若しくは居所を変更した場合には、速やかに、管轄公共職業安定所の長に届け出なければならない。

(事務の委嘱)

第二十四条 管轄公共職業安定所の長は、特定求職者の申出によって必要があると認めるときは、その者について行う職業訓練受講給付金に関する事務を他の公共職業安定所長に委嘱することができる。

2 前項の規定による委嘱が行われた場合は、当該委嘱に係る特定求職者について行う職業訓練受講給付金の支給に関する事務は、第十七条の規定にかかわらず、当該委嘱を受けた公共職業安定所長が行う。

3 前二項の場合における前章及びこの章の規定の適用については、これらの規定中「管轄公共職業安定所の長」とあるのは「委嘱を受けた公共職業安定所長」と、「管轄公共職業安定所」とあるのは「委嘱を受けた公共職業安定所」とする。

第四章 雑則

(権限の委任)

第二十五条 法第十八条第一項の規定により、次の各号に掲げる厚生労働大臣の権限は、当該各号に定める都道府県労働局長に委任する。ただし、厚生労働大臣が自らその権限を行うことを妨げない。

- 一 法第四条第二項、法第十五条第一項及び法第十六条第一項に規定する厚生労働大臣の権限
- 二 認定職業訓練が行われる事業所の所在地を管轄する都道府県労働局長
- 三 法第十五条第二項に規定する厚生労働大臣の権限
- 四 特定求職者の住所又は居所を管轄する都道府県労働局長(次項において「管轄都道府県労働局長」という。)

2 法第十八条第二項の規定により、前項第二号に掲げる権限は、管轄公共職業安定所の長に委任する。ただし、管轄都道府県労働局長が自らその権限を行うことを妨げない。

(帳簿の備付け)

第二十六条 認定職業訓練を行う者は、当該認定職業訓練の適正かつ確実な実施を確保するため、帳簿を備え付け、これに当該認定職業訓練の実施日、受講者その他の認定職業訓練に関する事項を記載するとともに、当該認定職業訓練終了後六年間、これを保管しなければならない。

2 前項の帳簿は、電磁的記録(電子的方式、磁気的方式その他人の知覚によつては認識することができない方式で作られる記録であつて、電子計算機による情報処理の用に供されるものをいう。)をもって作成することができる。

(立入検査の証明書)

第二十七条 法第十六条第一項の規定による立入検査をする職員は、様式第六号によるものとする。

2 法第十六条第三項の規定により同条第一項の規定による立入検査に関する事務を行う機構の職員は、様式第七号によるものとする。

(機構による認定職業訓練を行う者等に対する立入検査等の結果の通知)

第二十八条 法第十六条第四項の規定により厚生労働大臣に対して行う質問又は立入検査の結果の通知は、様式第八号による通知書によつて行うものとする。

(船員とならうとする者に関する特例)

第二十九条 船員職業安定法(昭和二十三年法律第三百十号)第六条第一項に規定する船員とならうとする者に関しては、第二条第一号ロの(1)中「公共職業安定所長」とあるのは「地方運輸局(運輸監理部並びに厚生労働大臣が国土交通大臣に協議して指定する運輸支局及び地方運輸局、運輸監理部又は運輸支局の事務所を含む。以下同じ。)の長」と、同条第二号、第十一条第一項及び第三項、第十二条の二第一項、第十四条の見出し、同条第一項及び第二項、第十五条第二項並びに第二十四条中「公共職業安定所長」とあるのは「地方運輸局の長」と、第二十五条第十五号中「公共職業安定所」とあるのは「地方運輸局」と、第十七条中「管轄する公共職業安定所」とあるのは「管轄する地方運輸局」と、同条第二十一条、第二十三条、第二十四条第一項及び第二項並びに第二十五条第二項中「管轄公共職業安定所」とあるのは「管轄地方運輸局」と、第二十四条第三項中「委嘱を受けた公共職業安定所」とあるのは「委嘱を受けた地方運輸局」とする。

附則 抄

(施行期日)

第一条 この省令は、平成二十三年十月一日から施行する。ただし、次条及び附則第七条の規定は、公布の日から施行する。

(相当認定を受けた職業訓練とみなされない事由)

第二条 法附則第三条第二項の厚生労働省令で定める事由は、相当認定に係る職業訓練が法第四条第一項各号のいずれかに適合しないこととする。

(特例認定職業訓練に係る厚生労働省令で定める基準の特例等)

第三条 申請職業訓練を行う者とする者が令和二年一月一日から同年五月三十日までの間に終了した認定職業訓練(次項において「特例認定職業訓練」という。)の実績を有する場合の第二条第一号ロの規定の適用については、同号ロ(1)中「三月」とあるのは「三月(令和二年一月一日から同年五月三十日までの間に終了した認定職業訓練の場合は六月)」と、「四月」とあるのは「四月(令和二年一月一日から同年五月三十日までの間に終了した認定職業訓練の場合は七月)」と、同号ロ(2)中「(1)」とあるのは「附則第三条の規定により読み替えて適用する(1)」と、同号ロ(3)中「第五条の規定により機構に提出する当該認定職業訓練に係る就職状況報告書における当該認定職業訓練の修了者等の就職率」とあるのは「当該認定職業訓練の修了者等の就職率」と、「(1)」とあるのは「附則第三条の規定により読み替えて適用する(1)」とする。

については、第二条第一号ロ(1)及び同号リ(3)の規定の適用については、認定職業訓練を行った者とみなす。この場合において、同号ロ本文中「認定職業訓練(法第四条第二項に規定する認定職業訓練をいう。以下同じ。)」とあるのは「附則第四条に規定する厚生労働大臣が定める職業訓練(以下この号において「附則第四条職業訓練」という。）」とし、同ロ(1)本文中「割合(当該認定職業訓練が終了した日から起算して四月を経過する日までの間に当該認定職業訓練を行った者が機構に届け出たものに限る。）」をいう。以下「とあるのは「割合をいう。以下この条において」と、「当該認定職業訓練」とあるのは「当該附則第四条職業訓練」と、「単位の認定職業訓練」とあるのは「単位の附則第四条職業訓練」と、「(修了者等)」とあるのは「修了者」と、「雇用保険法(昭和四十九年法律第十六号)第四条第一項に規定する被保険者(以下この条において「被保険者」という。))となつた者及び同法第五条第一項の適用事業の事業主となつた者」とあるのは「就職した者及び自営業者となつた者の数並びに就職理由退校者」と、「知識(以下「基礎的技能」という。))を付与するための認定職業訓練(以下「基礎訓練」という。))とあるのは「知識を付与するための附則第四条職業訓練」と、「基礎訓練から基礎的技能等並びに実践的な技能及びこれに関する知識を付与するための認定職業訓練(以下「実践訓練」という。))まで又は」とあるのは「当該附則第四条職業訓練から」と、「指示した」とあるのは「認めたと、一次に掲げる認定職業訓練の区分に応じ、「二以上」とあるのは「連続する二以上」と、一次に定める割合」とあるのは「百分の三十」とし、同(1)ただし書、(i)及び(ii)は適用せず、同号リ(3)中「認定職業訓練に係る職務の遂行に重大な不正の行為をしたことを理由として、法第四条第二項の規定により同条第一項の認定の取消しを受けた者又は過去に認定職業訓練に係る職務の遂行に重大な不正の行為をしたことにより、当該認定職業訓練が同条第一項各号のいずれかに適合しないものと厚生労働大臣が認めた者(当該認定の取消し又は同項各号列記の事項への不適合(以下この(3)において「認定の取消し等」という。))が、申請職業訓練を行うおとす都道府県と同一の都道府県以外の区域内において行った認定職業訓練に係るものであって、当該認定の取消し等の理由となつた事実及び当該事実の発生を防止するための当該認定職業訓練を行う者による取組の状況その他の当該事実に関して当該認定職業訓練を行う者が有していた責任の程度を考慮して、当該認定職業訓練を行う者が当該認定の取消し等の理由となつた事実について組織的に関与していると認められない場合を除くものとし、当該認定の取消しを受けた者又は当該厚生労働大臣が認めた者」とあるのは「附則第四条職業訓練に係る職務の遂行に重大な不正の行為をした者(当該不正の行為をした者」とし、同号リ(4)中「(3)の重大な不正の行為を理由として」とあるのは「(3)の」とし、同号リ(5)中「(3)の重大な不正の行為をしたことにより」とあるのは「(3)の」とする。

(通所手当に関する暫定措置)

第四条の二 第十二条の通所手当として、同条に規定するもののほか、当分の間、特定求職者の住所又は居所から訓練等施設までの距離が相当程度長い場合、訓練等施設に近接する宿泊施設(以下この条において「宿泊施設」という。))に一時的に宿泊し、宿泊施設から訓練等施設へ通所する者(宿泊施設を利用しなければ通所することが著しく困難であるものに限る。))に対して支給するものとする。

2 前項に規定する者に対する通所手当の給付金支給単位期間当たりの額は、次の各号に掲げる費用の合計額(以下この条において「一時的宿泊の場合の費用合計額」という。))とする。ただし、第一号に掲げる額は、認定職業訓練等を受ける期間を通じて一往復分を限度として支給し、一時的宿泊の場合の費用合計額が四万二千五百円を超えるときは、四万二千五百円とする。

一 特定求職者の住所又は居所から宿泊施設への移動(以下この号において「宿泊施設への移動」という。))に要する費用の額であつて、次のイからハまでに掲げる場合に依りて、それぞれイからハまでに掲げる額

イ 宿泊施設への移動のため交通機関等を利用してその運賃等を負担する場合(交通機関等を利用してなければ当該移動が著しく困難である場合以外の場合であつて、交通機関等を利用して徒歩により移動するものとした場合の当該移動の距離が片道二キロメートル未満であつて、

る場合及びハに該当する場合を除く。))当該交通機関等の利用区間についての運賃等の額であつて、最も低廉となるもの(ハにおいて「最低運賃等額」という。))

ロ 宿泊施設への移動のため自動車等を使用する場合(自動車等を使用しなければ当該移動が著しく困難である場合以外の場合であつて、自動車等を使用しない徒歩により移動するものとした場合の当該移動の距離が片道二キロメートル未満である場合及びハに該当する場合を除く。))自動車等を使用する距離が片道十キロメートル未満である場合であつては三千六百九十円、その他の場合にあつては五千八百五十円(指定地域に居住する場合であつて、自動車等を使用する距離が片道十五キロメートル以上である場合にあつては八千円)を当該移動のある日の月の現日数で除して得た額

ハ 宿泊施設への移動のため交通機関等を利用してその運賃等を負担し、かつ、自動車等を使用する場合(交通機関等を利用し、又は自動車等を使用しなければ当該移動が著しく困難である場合以外の場合であつて、交通機関等を利用せず、かつ、自動車等を利用しないで徒歩により移動するものとした場合の当該移動の距離が片道二キロメートル未満である場合を除く。))イに掲げる額とロに掲げる額との合計額(交通機関等を利用しなければ移動することが著しく困難な場合以外の場合であつて、通常徒歩によることが例である距離内においてのみ交通機関等を利用している場合又は自動車等を使用しなければ移動することが著しく困難な場合以外の場合であつて、自動車等を使用する距離が片道二キロメートル未満である場合にあつては、最低運賃等額がロに掲げる額以上である場合にはイに掲げる額、最低運賃等額がロに掲げる額未満である場合にはロに掲げる額)

二 宿泊施設から訓練等施設への通所(以下この号において「訓練等施設への通所」という。))に要する費用の額であつて、次のイからハまでに掲げる場合に依りて、それぞれイからハまでに掲げる額

イ 訓練等施設への通所のため交通機関等を利用してその運賃等を負担する場合(交通機関等を利用しなければ当該通所が著しく困難である場合以外の場合であつて、交通機関等を利用しない徒歩により通所するものとした場合の当該通所の距離が片道二キロメートル未満である場合及びハに該当する場合を除く。))当該交通機関等の利用区間についての一箇月の運賃等の額に相当する額(ハにおいて「宿泊施設から訓練等施設へ通所する場合の運賃等相当額」という。))

ロ 訓練等施設への通所のため自動車等を使用する場合(自動車等を使用しなければ当該通所が著しく困難である場合以外の場合であつて、自動車等を使用しない徒歩により通所するものとした場合の当該通所の距離が片道二キロメートル未満である場合及びハに該当する場合を除く。))自動車等を使用する距離が片道十キロメートル未満である場合にあつては三千六百九十円、その他の場合にあつては五千八百五十円

ハ 訓練等施設への通所のため交通機関等を利用してその運賃等を負担し、かつ、自動車等を使用する場合(交通機関等を利用し、又は自動車等を使用しなければ当該通所が著しく困難である場合以外の場合であつて、交通機関等を利用せず、かつ、自動車等を利用しないで徒歩により通所するものとした場合の当該通所の距離が片道二キロメートル未満である場合を除く。))イに掲げる額とロに掲げる額との合計額(交通機関等を利用しなければ通所することが著しく困難な場合以外の場合であつて、通常徒歩によることが例である距離内においてのみ交通機関等を利用している場合又は自動車等を使用しなければ通所することが著しく困難な場合以外の場合であつて、自動車等を使用する距離が片道二キロメートル未満である場合にあつては、宿泊施設から訓練等施設へ通所する場合の運賃等相当額がロに掲げる額以上である場合にはイに掲げる額、宿泊施設から訓練等施設へ通所する場合の運賃等相当額がロに掲げる額未満である場合にはロに掲げる額)

3 前項第一号に掲げる額を算定する場合には、第十二条第三項の規定を準用する。この場合において、同項中「運賃等相当額」とあるのは「附則第四条の二第二項第一号に規定する最低運賃等額」と読み替へるものとする。

4 第二項第二号に掲げる額を算定する場合には、第十二条第三項から第五項までの規定を準用する。この場合において、同条第三項及び第四項中「運賃等相当額」とあるのは、「附則第四條の二第二項第二号イに規定する宿泊施設から訓練等施設へ通所する場合の運賃等相当額」と読み替えるものとする。

（事務の委嘱に関する暫定措置）

第四條の三 管轄公共職業安定所の長は、当分の間、職業安定局長の定めるところにより、特定求職者の申出によって必要があると認めるときは、その者について行う就職支援計画書の作成及び交付に関する事務をその者が就職を希望する地域を管轄する公共職業安定所長であつて、職業安定局長が定める要件に該当するものに委嘱することができる。

2 前項の規定による委嘱が行われた場合は、当該委嘱に係る特定求職者について行う職業訓練受給付金の支給に關する事務並びに就職支援計画書の作成及び交付に關する事務は、第十七條、第二十一條及び第二十三條の規定にかかわらず、当該委嘱を受けた公共職業安定所長が行う。

3 前二項の場合における第二章及び第三章の規定の適用については、これらの規定中「管轄公共職業安定所の長」とあるのは「委嘱を受けた公共職業安定所長」と、「管轄公共職業安定所」とあるのは「委嘱を受けた公共職業安定所」とする。

（船員とならうとする者に関する特例）

第四條の四 船員職業安定法第六條第一項に規定する船員とならうとする者に関しては、前條第一項中「管轄公共職業安定所」とあるのは「職業訓練受給付金の支給を受けようとする特定求職者の住所又は居所を管轄する地方運輸局（運輸監理部並びに厚生労働大臣が国土交通大臣に協議して指定する運輸支局及び地方運輸局、運輸監理部又は運輸支局の事務を含む。第三項において「管轄地方運輸局」という。）と、「公共職業安定所長」とあるのは「地方運輸局（運輸監理部並びに厚生労働大臣が国土交通大臣に協議して指定する運輸支局及び地方運輸局、運輸監理部又は運輸支局の事務を含む。第三項において同じ。）の長」と、同條第三項中「管轄公共職業安定所」とあるのは「管轄地方運輸局」と、「委嘱を受けた公共職業安定所」とあるのは「委嘱を受けた地方運輸局」とする。

附則（平成二十三年八月三十一日厚生労働省令第一〇九号）

この省令は、平成二十三年十月一日から施行する。

附則（平成二十三年二月二十九日厚生労働省令第一四八号）

（施行期日）

第一条 この省令は、公布の日から施行する。

（経過措置）

第二条 この省令による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第八條の二及び第九條の規定は、平成二十四年一月一日以後に開始された認定職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律第四條第二項に規定する認定職業訓練をいう。以下同じ。）に係る認定職業訓練実施奨励金（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第七條に規定する認定職業訓練実施奨励金をいう。以下同じ。）の支給については、同日前に開始された認定職業訓練に係る認定職業訓練実施奨励金の支給については、なお従前の例による。

附則（平成二十四年三月三〇日厚生労働省令第五八号）

（施行期日）

第一条 この省令は、平成二十四年四月一日から施行する。

（経過措置）

第二条 この省令の施行の際この省令による改正前の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則様式第三号（次項において「旧様式」という。）により使用されている書類は、この省令による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則様式第三号によるものとみなす。

2 この省令の施行の際現にある旧様式による用紙については、当分の間、これを取り繕って使用することができる。

附則（平成二五年二月五日厚生労働省令第一〇号）
この省令は、公布の日から施行する。

附則（平成二五年五月一六日厚生労働省令第六七号）

（施行期日等）

第一条 この省令は、公布の日から施行する。

附則（平成二五年五月二七日厚生労働省令第七二号）

（施行期日）

第一条 この省令は、公布の日から施行する。

（経過措置）

第二条 この省令による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第二條第一号イ及び同号ロ（4）の規定は、平成二十五年十月一日以後に開始しようとする申請職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第二條第一号イに規定する申請職業訓練をいう。以下同じ。）の認定について適用し、同日前に開始しようとする申請職業訓練の認定については、なお従前の例による。

2 この省令の施行の際現にあるこの省令による改正前の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則様式第六号及び第七号による求職者支援検査証明書は、この省令による改正後のそれぞれの様式にかかわらず、当分の間、なおこれを使用することができる。

附則（平成二六年三月三日厚生労働省令第一六号）

この省令は、公布の日から施行する。

附則（平成二六年三月三十一日厚生労働省令第四三三号）

（施行期日）

第一条 この省令は、平成二六年四月一日（以下「施行日」という。）から施行する。ただし、附則第四條の二を削る改正規定、附則第四條の三第三項及び第四項の改正規定、同条を附則第四條の二とする改正規定、附則第四條の二の次に二條を加える改正規定並びに様式第四號の改正規定は、平成二六年七月一日から施行する。

（経過措置）

第二条 この省令による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則（以下「新規則」という。）第二條の規定（第一項第一号ロ（1）及び（2）の規定に限る。）は、施行日以後に開始された認定職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律第四條第二項に規定する認定職業訓練をいう。以下同じ。）の修了者等の就職率について適用し、施行日前に開始された認定職業訓練の修了者等の就職率については、なお従前の例による。

2 申請職業訓練を行おうとする者が施行日以後に開始された認定職業訓練の実績及び施行日前に開始された認定職業訓練の実績を有する場合の前項の規定の適用については、新規則第二條第一項第一号ロ（1）中「当該認定職業訓練が終了した日から起算」とあるのは「当該認定職業訓練（施行日（平成二六年四月一日をいう。以下この条において同じ。）以後に開始された認定職業訓練に限る。）が終了した日から起算」と、「以下同じ。」とあるのは「以下同じ。」又は修了者のうち当該認定職業訓練（施行日前に開始された認定職業訓練に限る。）が終了した日から起算して三月を経過する日までの間に就職した者及び自営業者となつた者の数並びに就職理由退校者の合計数が、修了者（基礎訓練の修了者のうち連続受講をする者を除く。）の数及び就職理由退校者の数の合計数に占める割合（以下この条において「改正前の就職率」という。）と、「百分の三十」とあるのは「百分の三十（施行日前に開始された認定職業訓練にあつては、改正前の就職率が百分の四十五）」と、「百分の三十五」とあるのは「百分の三十五（施行日前に開始された認定職業訓練にあつては、改正前の就職率が百分の五十）」と、同号ロ（2）中「当該認定職業訓練の修了者等の就職率」とあるのは「当該認定職業訓練（施行日以後に開始された認定職業訓練に限る。）の修了者等の就職率又は当該認定職業訓練（施行日前に開始された認定職業訓練に限る。）の修了者等の改正前の就職率」と読み替えるものとする。

職業訓練受講給付金（法第七条に規定する職業訓練受講給付金をいう。以下この項において同じ。）の支給について適用し、施行日前に開始された認定職業訓練等を受ける特定求職者に係る職業訓練受講給付金の支給については、なお従前の例による。

第三条 この省令の施行の際この省令による改正前の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則様式第一号及び様式第三号（次項において「旧様式」という。）により使用されている書類は、それぞれ新規規則様式第一号及び様式第三号によるものとみなす。

2 この省令の施行の際現に存する旧様式による書類については、当分の間、これを取り繕って使用することができる。

附 則（平成二十八年一〇月一九日厚生労働省令第一六一号）抄

（施行期日）
第一条 この省令は、公布の日から施行する。

附 則（平成二十九年三月三十一日厚生労働省令第四六号）

（施行期日）
第一条 この省令は、平成二十九年四月一日から施行する。

（経過措置）

第二条 この省令による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則（以下「改正後規則」という。）第二条第一号ロ（一）の規定は、平成二十八年十月二日以後に終了した認定職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律第四条第二項に規定する認定職業訓練をいう。以下同じ。）の修了者等の就職率について適用し、同日前に終了した認定職業訓練の修了者等の就職率については、なお従前の例による。

第三条 改正後規則附則第三条第一項及び第三条の第三第二項の規定は、この省令の施行の日以後に開始しようとする申請職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第二条第一号イに規定する申請職業訓練をいう。以下同じ。）の認定について適用し、同日前に開始しようとする申請職業訓練の認定については、なお従前の例による。

附 則（平成二十九年七月一日厚生労働省令第七一号）抄
（施行期日）
第一条 この省令は、厚生労働省組織令等の一部を改正する政令（平成二十九年政令第八十五号）の施行の日（平成二十九年七月十一日）から施行する。

附 則（平成二十九年九月二十九日厚生労働省令第一〇三号）抄
（施行期日）
第一条 この省令は、公布の日から施行する。

附 則（平成三〇年三月三〇日厚生労働省令第四五号）
この省令は、平成三十年四月一日から施行する。

附 則（平成三〇年七月六日厚生労働省令第八三号）抄
（施行期日）
1 この省令は、働き方改革を推進するための関係法律の整備に関する法律（平成三十年法律第七十一号）附則第一条第一号に掲げる規定の施行の日から施行する。

附 則（平成三二年三月二十九日厚生労働省令第四二号）
（施行期日）
第一条 この省令は、平成三十一年四月一日から施行する。

（経過措置）
第二条 この省令による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則附則第三条第一項の規定は、この省令の施行の日以後に開始しようとする申請職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第二条第一号イに規定する申請職業訓練をいう。以下同じ。）の認定について適用し、同日前に開始しようとする申請職業訓練の認定については、なお従前の例による。

附 則（平成三二年三月二十九日厚生労働省令第五七号）抄

（施行期日）
第一条 この省令は平成三十一年四月一日から施行する。

（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則の一部改正に伴う経過措置）

第五条 第五条の規定による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第九条の規定は、施行日以後に偽りその他不正の行為により、雇用保険法施行規則第二百二条の二に規定する雇用調整助成金その他の雇用保険法第四章の規定により支給される給付金の支給を受け、又は受けようとした認定職業訓練を行う者（以下この条において「不正受給を行う認定職業訓練を行う者」という。）に適用し、施行日前に不正受給を行う認定職業訓練を行う者については、なお従前の例による。

附 則（令和元年五月七日厚生労働省令第一号）抄

（施行期日）
第一条 この省令は、公布の日から施行する。

（経過措置）

第二条 この省令による改正前のそれぞれの省令で定める様式（次項において「旧様式」という。）により使用されている書類は、この省令による改正後のそれぞれの省令で定める様式によるものとみなす。

2 旧様式による用紙については、合理的に必要と認められる範囲内で、当分の間、これを取り繕って使用することができる。

附 則（令和元年六月二十八日厚生労働省令第二〇号）抄

（施行期日）
第一条 この省令は、不正競争防止法等の一部を改正する法律の施行の日（令和元年七月一日）から施行する。

（様式に関する経過措置）
第二条 この省令の施行の際現にあるこの省令による改正前の様式（次項において「旧様式」という。）により使用されている書類は、この省令による改正後の様式によるものとみなす。

2 この省令の施行の際現にある旧様式による用紙については、当分の間、これを取り繕って使用することができる。

附 則（令和元年八月三〇日厚生労働省令第三八号）

（施行期日）
第一条 この省令は、令和二年一月一日（次条において「施行日」という。）から施行する。

（経過措置）

第二条 この省令による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則（以下「新規規則」という。）第二条第一号ロ（一）の規定は、施行日以後に開始された認定職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律第四条第二項に規定する認定職業訓練をいう。以下同じ。）の修了者等の就職率について適用し、同日前に開始された認定職業訓練の修了者等の就職率については、なお従前の例による。

2 新規規則第二条第一号ロ（四）及び第五条の規定並びに様式第二号の様式は、施行日以後に開始された認定職業訓練に係る就職状況報告書について適用し、同日前に開始された認定職業訓練に係る就職状況報告書については、なお従前の例による。

3 この省令の施行の際現にあるこの省令による改正前の様式による用紙については、当分の間、これを取り繕って使用することができる。

附 則（令和元年九月一三日厚生労働省令第四六号）抄

（施行期日）
第一条 この省令は、成年被後見人等の権利の制限に係る措置の適正化等を図るための関係法律の整備に関する法律（令和元年法律第三十七号）の施行の日（令和元年九月十四日）から施行する。

附則（令和二年三月三十一日厚生労働省令第七号）

（施行期日）

第一条 この省令は、公布の日から施行する。ただし、附則第三条、第三条の三及び第三条の四に係る改正規定は、令和二年四月一日から施行する。

（経過措置）

第二条 この省令による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則（以下この項及び次項において「規則」という。）第二条の規定は、この省令の施行の日以後に開始しようとする申請職業訓練（規則第二条第一号イに規定する申請職業訓練をいう。以下この項及び次項において同じ。）の認定について適用し、同日前に開始しようとする申請職業訓練の認定については、なお従前の例による。

2 この省令の施行の日前に行われたこの省令による改正前の規則附則第三条の三又は第三条の四の規定による申請職業訓練の認定については、なお従前の例による。

3 この省令の施行の際現にあるこの省令による改正前の様式（次項において「旧様式」という。）により使用されている書類は、この省令による改正後の様式によるものとみなす。

4 この省令の施行の際現にある旧様式による用紙については、当分の間、これを取り繕って使用することができる。

附則（令和二年三月三十一日厚生労働省令第七八号）抄

（施行期日）

第一条 この省令は、令和二年四月一日から施行する。

附則（令和二年七月七日厚生労働省令第一三七号）

（施行期日）

1 この省令は、公布の日から施行する。

（経過措置）

2 この省令による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則附則第三条の三第二項及び第三項の規定は、この省令の施行の日前に出があった認定職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律（平成二十三年法律第四十七号）第四条第二項に規定する認定職業訓練をいう。）に係る認定職業訓練実施付加奨励金（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第八条第四項に規定する認定職業訓練実施付加奨励金をいう。）の支給についても適用する。

附則（令和二年二月二十五日厚生労働省令第二〇八号）抄

（施行期日）

第一条 この省令は、公布の日から施行する。

（経過措置）

第二条 この省令の施行の際現にあるこの省令による改正前の様式（次項において「旧様式」という。）により使用されている書類は、この省令による改正後の様式によるものとみなす。

2 この省令の施行の際現にある旧様式による用紙については、当分の間、これを取り繕って使用することができる。

附則（令和三年二月二日厚生労働省令第三一号）

（施行期日）

1 この省令は、公布の日から施行する。

（経過措置）

2 この省令の施行の際現にこの省令による改正前の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第一条の規定により申請があった申請職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第二条第一号イに規定する申請職業訓練をいう。以下この項において同じ。）については、この省令による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則（以下この項において「新規則」という。）第一条の規定により申請があった申請職業訓練とみなして、新規則第二条第一号ロ（2）及び（4）並びに新規則附則第三条の四第一項の規定を適用する。

附則（令和三年二月二十五日厚生労働省令第四一号）

（施行期日）

1 この省令は、公布の日から施行する。

（経過措置）

2 この省令の施行の際現にこの省令による改正前の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第一条の規定により申請があった申請職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第二条第一号イに規定する申請職業訓練をいう。以下この項において同じ。）については、この省令による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則（以下この項において「新規則」という。）第一条の規定により申請があった申請職業訓練とみなして、新規則附則第三条の五の規定を適用する。

附則（令和三年三月三十一日厚生労働省令第七九号）

この省令は、令和三年四月一日から施行する。

附則（令和三年九月二八日厚生労働省令第一六二号）

（施行期日）

1 この省令は、令和三年十月一日から施行する。

（経過措置）

2 この省令の施行の際現にこの省令による改正前の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第一条の規定により申請があった申請職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第二条第一号イに規定する申請職業訓練をいう。以下この項において同じ。）については、この省令による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則（以下この項において「新規則」という。）第一条の規定により申請があった申請職業訓練とみなして、新規則の規定を適用する。

附則（令和三年二月二日厚生労働省令第一九五号）抄

（施行期日）

第一条 この省令は、公布の日から施行する。

（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則の一部改正に伴う経過措置）

第三条 この省令の施行の際現に第二条の規定による改正前の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則（次項において「旧求訓則」という。）第一条の規定により申請があった申請職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第二条第一号イに規定する申請職業訓練をいう。以下この項において同じ。）については、この省令による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則（以下この項及び次項において「新求訓則」という。）第一条の規定により申請があった申請職業訓練とみなして、新求訓則附則第三条の四の二の規定を適用する。

2 この省令の施行の際現に旧求訓則様式第三号（次項において「旧様式」という。）により使用されている書類は、新求訓則様式第三号によるものとみなす。

3 この省令の施行の際現にある旧様式による用紙については、当分の間、これを取り繕って使用することができる。

附則（令和四年三月三十一日厚生労働省令第六一号）

（施行期日）

1 この省令は、令和四年四月一日から施行する。

（経過措置）

2 この省令の施行の際現に行われているこの省令による改正前の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則（次項において「旧求訓則」という。）附則第三条第一項に規定する職業訓練については、同条の規定の適用については、なお従前の例による。

3 この省令の施行の際現に旧求訓則第一条の規定により申請があった申請職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第二条第一号イに規定する申請職業訓練

訓練をいう。以下この項において同じ。）については、この省令による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則（以下この項において「新規則」という。）第一条の規定により申請があつた申請職業訓練とみなして、新規則の規定を適用する。

附則（令和四年三月三十一日厚生労働省令第七三三号）抄

（施行期日）

第一条 この省令は、令和四年四月一日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

- 一 第一条中雇用保険法施行規則第十九条、第三十一条、第三十一条の三から第三十一条の六まで、第百四十四条の二第一項及び附則第二十七条の改正規定並びに様式第十二号、様式第十六号及び様式第十七号の改正規定並びに第五条及び第八条の規定 令和四年七月一日

附則（令和四年二月二日厚生労働省令第一六三三号）

（施行期日）

1 この省令は、公布の日から施行する。

（経過措置）

- 2 この省令の施行の際現にこの省令による改正前の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第一条の規定により申請があつた申請職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第二条第一号イに規定する申請職業訓練をいう。以下この項において同じ。）については、この省令による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則（以下この項において「新規則」という。）第一条の規定により申請があつた申請職業訓練とみなして、新規則の規定を適用する。

附則（令和五年三月三十一日厚生労働省令第六〇号）

（施行期日）

第一条 この省令は、令和五年四月一日から施行する。

（経過措置）

- 第二条** この省令の施行の際現に行われている職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律第四条第二項の認定職業訓練に係るこの省令による改正前の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則（次項及び第三条において「旧求則」という。）附則第三条の第七第二項及び第四項の規定の適用については、なお従前の例による。

- 2 この省令の施行の際現に旧求則第一条の規定により申請があつた申請職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第二条第一号イに規定する申請職業訓練をいう。以下この項において同じ。）については、この省令による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則（以下「新求則」という。）第一条の規定により申請があつた申請職業訓練とみなして、新求則の規定を適用する。

- 3 新求則の職業訓練受講給付金の支給に係る規定は、この省令の施行の日以後に開始された認定職業訓練等（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律第七条第一項に規定する認定職業訓練等をいう。以下この項において同じ。）を受けける特定求職者に係る職業訓練受講給付金の支給について適用し、この省令の施行の前日に開始された認定職業訓練等を受ける特定求職者に係る職業訓練受講給付金の支給については、なお従前の例による。

- 2 この省令の施行の際現に旧求則様式第三号（次項において「旧様式」という。）により使用されている書類は、新求則様式第三号によるものとみなす。

- 2 この省令の施行の際現にある旧様式による用紙については、当分の間、これを取り繕って使用することができる。

附則（令和五年二月八日厚生労働省令第一五二二号）

（施行期日）

1 この省令は、公布の日から施行する。

（経過措置）

- 2 この省令の施行の際現にこの省令による改正前の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第一条の規定により申請があつた申請職業訓練（同令第二条第一号イ

に規定する申請職業訓練をいう。以下この項において同じ。）については、この省令による改正後の同令（以下この項及び次項において「新規則」という。）第一条の規定により申請があつた申請職業訓練とみなして、新規則附則第三条の三及び第三条の四の規定を適用する。

- 3 新規則附則第三条の三及び第三条の四の規定は、この省令の施行の日以後に開始した認定職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律第四条第二項に規定する認定職業訓練をいう。以下この項において同じ。）であつて厚生労働省人材開発統括官が定めるものに係る認定職業訓練実施基本奨励金（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第八条第二項に規定する認定職業訓練実施基本奨励金をいう。以下この項において同じ。）の支給について適用し、同日前に開始した認定職業訓練であつて厚生労働省人材開発統括官が定めるものに係る認定職業訓練実施基本奨励金の支給については、なお従前の例による。

附則（令和六年三月二十九日厚生労働省令第七〇号）

（施行期日）

第一条 この省令は、令和六年四月一日（以下「施行日」という。）から施行する。ただし、様式第一号の改正規定は、同年七月一日から施行する。

（経過措置）

- 第二条** この省令による改正後の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則（以下「新規則」という。）第二条第一号ロ（一）から（三）までの規定は、施行日以後に開始された認定職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律第四条第二項に規定する認定職業訓練をいう。以下この条において同じ。）の修了者等（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第二条第一号ロ（一）に規定する修了者等をいう。以下この条において同じ。）の就職率（同（一）に規定する就職率をいう。以下この条において同じ。）に係る実績について適用し、同日前に開始された認定職業訓練の修了者等の就職率に係る実績については、なお従前の例による。

- 3 新規則第二条第五号及び第六号の規定は、施行日以後に開始しようとする申請職業訓練（職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第二条第一号イに規定する申請職業訓練をいう。以下この条において同じ。）の認定について適用し、同日前に開始しようとする申請職業訓練の認定については、なお従前の例による。

- 4 4 この省令の施行の際現にこの省令による改正前の職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則様式第一号及び第三号（次項において「旧様式」という。）により使用されている書類は、それぞれ新規則様式第一号及び第三号によるものとみなす。

- 2 この省令の施行の際現にある旧様式による用紙については、当分の間、これを取り繕って使用することができる。

様式第2号(第5条関係)(表面)

令和 年 月 日

独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構 理事長 殿

(報告者)
フリガナ
所在地
フリガナ
商号又は名称
フリガナ
代表者役職名・氏名

認定職業訓練に係る就職状況報告書

職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第5条の規定により、下記のとおり認定職業訓練の修了等の就職状況を報告します。

記

- 1 訓練実施機関番号 _____
- 2 訓練実施施設名 _____
所在地 _____
- 3 訓練コース番号 _____
- 4 訓練科名 _____
- 5 修了者等の就職状況
- (1) 受講者数 計 _____ 名 うち修了者 _____ 名
中途退校者(就職理由) _____ 名
中途退校者(それ以外) _____ 名
- (2) 就職者数 計 _____ 名 うち雇用保険被保険者 _____ 名
(雇用保険適用) 雇用保険適用事業主 _____ 名
- 6 就職率
雇用保険適用就職率 _____ % (小数点以下は切捨て)

社会保険 労務士 記載欄	作成年月日・提出代行者 ・事務代理者の表示	氏名	電話番号

※機構処理欄

施設名: _____ 担当者: _____ ⑤
報告書受理日: _____

様式第2号(第5条関係)(裏面)

(注 意 事 項)

- 報告内容は正しく記載してください。虚偽又は不正の報告を行ったことが判明した場合には、以後の認定を認めないことや、訓練終了後の奨励金を支払わないこと等、所要の措置を講ずることがあるばかりでなく、職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律の規定により刑罰に処せられることがあります。
- 1「訓練実施機関番号」には、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構から認定職業訓練を行う機関に係る番号として交付されたものを記載してください。
- 2「訓練実施施設名」「所在地」には、実際に認定職業訓練を行った施設の名称及び所在地を記載してください。
- 3「訓練コース番号」については、認定を受けた際、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構から個別の訓練に係る番号として交付されたものを記載してください。
- 5(1)については、それぞれ以下の数値を記載してください。
 - 「受講者数」：訓練開始時における受講者数
 - 「修了者数」：訓練実施期間における修了判定により、修了したものと認められた者の数
 - 「中途退校者(就職理由)」：就職したこと(自営業者になったことを含む。以下同し。)を理由として中途退校した者の数
 - 「中途退校者(それ以外)」：就職したこと以外の理由により中途退校した者の数
- 5(2)については、それぞれ以下の数値を記載してください。
 - 「就職者数(雇用保険適用)」：認定職業訓練が終了した日の翌日から起算して三月を経過する日までの間に雇用保険被保険者又は雇用保険適用事業主となった旨を訓練実施機関に対して報告した者の数(訓練終了日において65歳以上の者を除く)
 - 「雇用保険被保険者」：雇用保険被保険者として就職した旨を訓練実施機関に対して報告した者の数
 - 「雇用保険適用事業主」：雇用保険適用事業主となった旨を訓練実施機関に対して報告した者の数
- 6「就職率」については、以下の式により算定した値を記載してください。

雇用保険適用就職率: $\frac{\text{就職者(被保険者+適用事業主)}}{\text{修了者+中途退校者(就職理由)}} \times 100$ (パーセント)

注1 基礎コースの場合は、実践コース又は公共職業訓練を受講中又は受講決定した者の数を分母から除きます。

注2 訓練終了日において65歳以上の者の数は分母及び分子から除きます。

- 8 ※機構処理欄には、記載しないでください。

様式第3号(第17条関係)(表面) (様式B-6)

職業訓練受講給付金支給申請書

①受講者番号											
フリガナ											
②氏名											
③生年月日	昭和	平成	年	月	日						
④住所											
⑤個人番号											
⑥訓練コース番号											
⑦訓練科名											
⑧訓練実施施設名											
⑨支給申請の対象となる訓練期間	令和	年	月	日	～	令和	年	月	日		
⑩収入											
⑪現在の就労の有無	<input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無										
支給申請内容	⑫事前審査時からの変更	<input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無									
	⑬借付書類	<input type="checkbox"/> 就職支援計画書 <input type="checkbox"/> 職業訓練受講給付金支給状況(支給記録)									
	⑭寄附の有無	<input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無									
	⑮職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律施行規則第17条の規定により、上記のとおり職業訓練受講給付金(職業訓練受講手当・通所手当・寄宿手当)の支給を申請します。										
令和 年 月 日 公海職業安全部長 地方産業局長 申請者氏名											

(注 意 事 項)

- 申請内容は正しく記載してください。偽りその他の不正の行為によって職業訓練受講給付金を受けたり、又は受けようとしたときは、以後職業訓練受講給付金を受けようができなくなるほか、正しく支給した金額の返還と更にそれに加えて一定の金額の納付を命ぜられ、また、詐欺罪として刑罰に処せられることがあります。
- この申請書は、書送票併用により、必ず本人が提出してください。
- 職業訓練受講手当の額は、支給申請の対象となる訓練期間(支給単位期間)が28日未満の場合は3,580円、支給単位期間における日数、それ以外の場合1100,000円となります。
- 通所手当の額は、職業訓練受講給付金申請書を参照し、通所、寄宿、看護等の事情に照らし、実所が算定した額となります。
- 寄宿手当の額は、支給単位期間につき10,700円となります。
- 3～5の手当は、育児・介護中等の特定求職者がやむを得ない理由以外の理由により受講しなかった訓練実施日(時間数)があることにより、減額される場合があります。
- ⑬欄は、職業訓練受講給付金事前審査時に記載された受講者番号を記載してください。
- ⑭欄は、事前審査時から変更があった場合(事前審査後に個人番号を取得した場合を含む。)に記載してください。
- ⑯欄は、あなたが受講する訓練コース番号、訓練科名、訓練実施施設名を記載してください。
- ⑰欄は、今回の支給申請において、給付金の支給対象となる訓練期間を記入してください。
- ⑱欄は、「本人収入」とはあなたの収入を、「世帯収入」はあなたの収入に加え、同居又は別居の配偶者、子及び父母の収入を合算した収入を指します。
- ⑳欄について、現在の就労の有無について該当する項目にチェックを入れてください。
- ㉑欄について、①欄の受講者番号に係る事前審査を受けたときから現在の間に、状況の変化があった場合(例えば、家族状況に変化があったなど)は「有」及び該当する項目にチェック(金額記載については金額の記載を含む。)を入れてください。また、今回支給申請を行う訓練において既に職業訓練受講給付金の支給を受けたことがある場合は、「事前審査時」を「前回職業訓練受講給付金の支給を受けた時」と読み替えてください。
- ㉒欄は、職業訓練を受けなかった日又は職業訓練等の一部のみ受けた日がある場合であって、疾病若しくは負傷又はやむを得ない理由がある場合にはそれを確認できる書類を添付するとともに、⑱欄の「その他」にチェックを入れ、書類名等を()内に記載してください。
- ㉓欄について、該当するものにチェックを入れてください。なお、「有」にチェックを入れた場合であって「別居して寄宿していない日」があるときは、その日及び理由を()内に記載してください。

様式第3号(裏面) 受講者氏名

求職者支援訓練等受講証明																		
① 有償講座に該当する旨を付けてください。	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7				
(1)職業訓練が行われなかった日 ⇒印(既済)	8	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14				
(2)職業訓練の一部のみ受けた日 ⇒印	15	16	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21				
(3)職業訓練を受けなかった日 ⇒印	22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28				
総計(22日～28日)	29	30	31					29	30	31								
② 職業訓練の一部のみ受けた日について、右の時間欄に該当する旨を付けてください。																		
(1)出席した時間	時間						時間											
(2)欠席した時間	時間						時間											
(3)遅刻した時間	時間						時間											
(4)早退した時間	時間						時間											
(5)訓練を実施していない時間 ⇒印(既済)	時間						時間											
時間	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
時間	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
時間	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
時間	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
時間	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
時間	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
時間	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
時間	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
時間	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
③ 特記事項																		
④ 自署から申請までの記入者の職氏名																		
⑤ 上記の記載事実と異なることを証明する。																		
令和 年 月 日																		
(求職者支援訓練等の施設の長の職氏名)																		
欠席日数	1日	0.5日	合計	出席日数/訓練日数	出席率	出席率												
職業訓練受講手当																		
通所手当																		
寄宿手当																		
合計																		

(注 意 事 項)

- 申請内容は正しく記載してください。受講者が前回の証明によって職業訓練受講給付金を不正受給した場合は、不正受給した金額と申請して不正受給した金額の返還と更にそれに加えて一定の金額の納付を命ぜられ、また、受給した認定職業訓練実施施設助金の返還を命ぜられることがあります。
- ①及び②欄については、⑱欄に記載した「支給申請の対象となる訓練期間」における受講状況を記載してください。
- ③欄には、職業訓練の出入りに関し、本人の申告などで特記すべき事項がある場合に記載してください。
- ④欄には、自署から申請までの受講者の出席状況等を記載した求職者支援訓練等の施設の担当者の職氏名を記載してください。
- ※印欄は、記載しないでください。

様式第4号(第17条関係)(第1面)

就職支援計画書		写真 4cm×3cm
受講者番号	氏名	生年月日 年 月 日
住所 〒 ー		管轄公共職業安定所又は管轄地方運輸局
訓練実施施設名		訓練実施施設を管轄する公共職業安定所又は地方運輸局
訓練科名		
訓練開始日 令和 年 月 日	訓練終了日 令和 年 月 日	
交付年月日 令和 年 月 日		
公共職業安定所又は地方運輸局の長名		印
※職員記入欄		

様式第4号(第17条)(第2面)

就職に向けた活動計画			あなたの求職活動記録		
来所日	公共職業安定所又は地方運輸局による計画	あなたの求職活動記録	A	B	C
【第1回】 令和 年 月 日 ～ 令和 年 月 日 公共職業安定所又は地方運輸局確認印	① 公共職業安定所又は地方運輸局での職業相談	公共職業安定所又は地方運輸局確認欄			
	② セミナーの受講				
	③ 応募求人への参加				
令和 年 月 日	④ 求人への応募				
令和 年 月 日	⑤ 就職面接会への参加				
令和 年 月 日	⑥ 連続受講する訓練の選定				
第 回計画作成者	⑦ その他				
作成日 令和 年 月 日	公共職業安定所又は地方運輸局追記欄				
		拒否			
		欠席			
【第2回】 令和 年 月 日 ～ 令和 年 月 日 公共職業安定所又は地方運輸局確認印	① 公共職業安定所又は地方運輸局での職業相談	公共職業安定所又は地方運輸局確認欄			
	② セミナーの受講				
	③ 応募求人への参加				
令和 年 月 日	④ 求人への応募				
令和 年 月 日	⑤ 就職面接会への参加				
令和 年 月 日	⑥ 連続受講する訓練の選定				
第 回計画作成者	⑦ その他				
作成日 令和 年 月 日	公共職業安定所又は地方運輸局追記欄				
		拒否			
		欠席			
【第3回】 令和 年 月 日 ～ 令和 年 月 日 公共職業安定所又は地方運輸局確認印	① 公共職業安定所又は地方運輸局での職業相談	公共職業安定所又は地方運輸局確認欄			
	② セミナーの受講				
	③ 応募求人への参加				
令和 年 月 日	④ 求人への応募				
令和 年 月 日	⑤ 就職面接会への参加				
令和 年 月 日	⑥ 連続受講する訓練の選定				
第 回計画作成者	⑦ その他				
作成日 令和 年 月 日	公共職業安定所又は地方運輸局追記欄				
		拒否			
		欠席			

注 意

- 1 この計画書は、原則として住所又は居所を管轄する公共職業安定所又は地方運輸局の長に、必ず本人が提出してください。
- 2 この計画書は、就職支援期間(訓練終了後3ヶ月間)が終了するまで大切に保管してください。
- 3 この計画書を滅失したり、損傷したりしたときは、速やかに原則として住所又は居所を管轄する公共職業安定所又は地方運輸局の長に申し出て再交付を受けてください。
- 4 「あなたの求職活動記録」欄には、求職活動を行う都度、求職活動日、内容やその結果を記入してください(訓練実施機関が行う就職指導を受けた場合についても記入してください)。なお、公共職業安定所又は地方運輸局において、職業相談、セミナーの受講、求人情報の検索をしたときや就職面接会に参加したときには、必ずこの計画書を公共職業安定所又は地方運輸局に持参し、確認を受けてください。
- 5 就職した場合や退校した場合には、原則として住所又は居所を管轄する公共職業安定所又は地方運輸局に必ず報告してください。

様式第5号(第20条関係)(表面)

(日本産業規格B列8)

様式第5号

職業訓練受講給付金返納金等
滞納者財産差押証明書

第 号
都道府県
労働局印

官 職
氏 名
生年月日

写 真

令和 年 月 日交付

様式第5号(第20条関係)(裏面)

この証明書を所持する者は、職業訓練の実施等による特定求職者の就職の
支援に関する法律第8条第3項の規定により、同法の規定による返納金等を滞
納している者の財産の差押えをする権限を有する。

様式第6号(第27条関係)(表面)

(日本産業規格B列8)

様式第6号	第 号
求 職 者 支 援 検 査 証 明 書	
厚生労働大臣又は都道府県労働局長印	
写 真	官 職
	氏 名
	生年月日
令和 年 月 日交付	

様式第6号(第27条関係)(裏面)

この検査証明書を所持する者は、職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律第16条の規定により、認定職業訓練を行う者等の事務所に立ち入り、関係者に対して質問し、又は帳簿書類(その作成又は保存に代えて電磁的記録(電子的方式、磁気的方式その他の知覚によっては認識することができない方式で作られる記録であって、電子計算機による情報処理の用に供されるものをいう。))の作成又は保存がされている場合における当該電磁的記録を含む。)の検査をすることができる。

様式第7号(第27条関係)(表面)

(日本産業規格B列8)

様式第7号	第 号
求 職 者 支 援 検 査 証 明 書	
写 真	職 名
	氏 名
	生年月日
令和 年 月 日交付	
<small>独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構理事長印</small>	

様式第7号(第27条関係)(裏面)

この検査証明書を所持する者は、職業訓練の実施等による特定求職者の就職の支援に関する法律第16条の規定により、認定職業訓練を行う者等の事務所に立ち入り、関係者に対して質問し、又は帳簿書類(その作成又は保存に代えて電磁的記録(電子的方式、磁気的方式その他の知覚によっては認識することができない方式で作られる記録であって、電子計算機による情報処理の用に供されるものをいう。))の作成又は保存がされている場合における当該電磁的記録を含む。)の検査をすることができる。

様式第8号(第28条関係)

求職者支援 検査 結果通知書
質問 質問

対象者の氏名(法人にあつては、名称及び代表者の氏名)	
対象者の住所(法人にあつては、主たる事務所の所在地)	
訓練実施機関番号	
認定職業訓練が行われる施設の所在地	
訓練コース番号	
訓練科名	
実施年月日	
実施結果	
備 考	

上記により、検査の結果を通知します。

令和 年 月 日

独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構理事長 ㊦

厚生労働大臣 殿

(注意)

1 用紙の大きさは、日本産業規格A4とすること。